
野良少女

氷室

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

野良少女

【Nコード】

N9839D

【作者名】

氷室

【あらすじ】

バイト後の夜、帰り道を急ぐ浅井健太郎は自宅近くの公園から不審な音と声を聞いた。気になった健太郎は公園へ入って行き、何事か確かめる。そこにいたのはゴミ箱を漁る一人の少女だった。

第一章 ホームレスの少女

第一章 ホームレスの少女

「さっさと帰らないと明日の授業が辛くなっちゃうな」

薄暗い夜の通りを浅井健太郎は駆けていた。夜十時までバイトをしていた彼は翌日の大学に影響を出さないように迅速に行動をとる必要があった。五月の夜、それなりに快適な気候ではあるが走っている健太郎は汗が吹き出していた。滲む汗を気にせず、一目散に自宅まで駆け抜ける。

角を曲がり、直線をひた走り、ただ一目散に自宅を目指す。まだ大学に入ったばかりの一年生。それが五月という初めも初めの時期に寝坊をしてサボるなどしたくない健太郎は止まることなく走る。

「うーん……。なかなかいい物が見つかりませんね」

しかし、突如耳に入ってきた声に健太郎は思わず足を止めた。辺りを確認すると場所は自宅近くの公園だった。

「このままじゃ今日も断食です。辛いです」

がさごそと何かを漁る音と共に女の子の声が聞こえてくる。気になった健太郎は少し怖かったが、音と声の発信源である公園へと足を進めた。

明日は朝一から授業があり、一秒でも時間を無駄にしたくなかった健太郎ではあるが、湧き上がる好奇心には勝てず、ずんずん公園の中を進む。

「何かいい物は……。あっ！ ありました！」

着実に声に近付いている。健太郎は息を飲みながら歩を進める。

そして開けた広場に出た時、とうとう声の主が視界に入ってきた。健太郎は警戒しながらその人物に近付いていく。

「食べ残しのお弁当です！ 大収穫ですよ！」

何か嬉しいことでもあったらしく目の前の女の子は突然はしゃぎ

出す。少し驚かされた健太郎であつたが、もうここまで来たら引く気などない。女の子に手を伸ばし、肩に手を置く。

「こんな所で何してるの？　もう遅いし危ないよ」

「ひっ!？」

当たり前のことだが、女の子は驚き、健太郎から距離をとる。見るからに警戒しているその態度に健太郎はしくじったと後悔した。

（暗がりです突然後ろから声をかける男。完全に俺変質者じゃねえか）
自分のとった行動が世間的にまずい行動だったと悟った健太郎は動揺をし始める。このままでは叫び声を上げられかねない。まずは相手を安心させなくてはと思うものの、焦っているためか何も名案など浮かびもしない。

ただただ冷や汗を流している健太郎を相変わらず女の子は不審そうな目で見つめている。警戒を解かないまま女の子は健太郎に質問を浴びせかける。

「あ、あのう……。どちら様でしょうか？」

相手の方から話の糸口を作ってくれたことに素早く反応した健太郎は必死に弁明に努め始める。

「お、俺は怪しい者じゃないよ。俺は浅井健太郎って言うんだ、よろしく」

「あっ、これはご丁寧にどうもです。私は石川千紗といいます。こちらこそよろしく願います」

どこかほのぼのした雰囲気になってきたことに健太郎は安堵し始めていた。このまま叫び声を上げられるような展開にはしないよう注意して健太郎は話をつなぐ。

「それにしてもこんな所で何をしてるの？　もう暗いし、女の子が一人で危ないよ」

「今日のご飯を探していたんですよ。もう三日も何も食べていないんです。……はっ!？」

突然何かに気付いたかのように千紗は警戒を強める。千紗の言っていることに疑問を感じた健太郎だったがその行動に驚いたのか口

を挟むことが出来ない。

「こ、このお弁当は渡せませんよ。私が先に見つけたんですから。三日ぶりのご飯なんですから!」

あまりに想定外の言葉に健太郎は嘆息した。誰が好き好んでゴミ箱に捨ててあったコンビニ弁当の食べ残しを奪ったりするものか。そんな物を奪いそうに思えるほど自分は卑しく見えるのかと悲しくなってくる。

「いや、そんなゴミ箱に捨ててあった弁当なんかいらないし」

「怪しいです」

「だいたい君もそんな物食べたらお腹壊すよ。それに三日も何も食べないって一体どういうことなんだ?」

健太郎が先ほど腑に落ちなかった点を質問すると千紗は警戒をしながらも口を開いた。そこから飛び出した言葉は健太郎を沈黙させるに足るほどの予想外のものだった。

「私、食べ物どころか家もないんです」

第一章 ホームレスの少女（後書き）

ということで野良少女始めました。まだまだ未熟者なので至らない点数々あるでしょうが、これからお読み頂けると光栄です。

第二章 俺のどこに来ないか？

第二章 俺のどこに来ないか？

「私、食べ物どころか家もないんです」

千紗が発した言葉に健太郎は固まった。予想の範疇を超えた言葉を理解するのにしばらく時間が必要な様子である。

（はあ？ 家がない？ まさかなあ……）

頭の中で冗談ではないだろうかという考えが浮かんでくるが、そうでもなければ公園のゴミ箱を漁って、食べかけのコンビニ弁当を発掘するなんていう行動をする必要がない。それに悪ガキならともかく公園のゴミ箱を漁るなんて女の子が遊びでもするような行動ではない。

「ちなみに君って年はいくつ？」

女の子に年を聞くなんて失礼な質問だが健太郎は確認をしておきたかった。見た目はどうみても公園で見境なく遊ぶ年の子には見えないが、もしかしたら発育の良い子かもしれない。

「年ですか？ 今、十八です」

あっさり答えてくれたことに健太郎は少々驚いたが、これで彼の考えは大きく信じる方に傾いた。まさかい年した女の子がゴミ箱漁って遊んでいるわけがない。エロ本を探している男子高校生ならもしかしたらいるかもしれないが。

とにかく千紗の言葉をいたずらに疑うことをやめた健太郎は次に聞いておかなければならないことがあった。それをストレートに千紗に尋ねていく。

「もしかして家出？」

「いえ、違います。家出じゃないですよ」

千紗は微笑みながら素直に質問に答えていく。いつの間にか警戒がだいぶ解けていることに健太郎は気付いた。とにかく話しやすく

なってよかったと健太郎は安堵する。通報という最悪の事態は避けられたようだ。

「家出じゃないなら一体どうしたんだ？」

「はい。私、実は田舎から出てきまして最初の内はこっちでアパートに住みながらバイトをしていたんですが……」

「何かあったのか？」

「私のお友達という人から電話がかかってきてまして、お金に困っていると言ってきたんですよ」

「……」

健太郎は実に嫌な予感がしていた。もうこの先は聞かなくてもわかりそうなものだったが、一応話させた手前打ち切るわけにもいかない。それに心のどこかでそんなものに引かかるほど単純ではないだろうと信じたかった。

「それでここにお金を振り込んでくれ、頼むと言われたので可哀そうと思って……」

「振り込んだじゃったの!？」

「はい。そうしたらそれきり何にも連絡がなくて気が付いたら私の生活が困ってしまつて」

「それで今に至ると」

「はい」

あまりに想像通りの展開で健太郎は頭が痛くなってきた。せめてもう一山越して欲しかった。まさか最初の詐欺にそのままやられて破滅とは。いくら田舎から出てきたとはいえそれぐらい判断して欲しかった。

「あの人はどうなったんでしょう。助かったならいいんですが」「おいっ!」

だからあなたは騙されたんですからと健太郎は全力で突っ込みたかった。世間の怖さをあまりにも知らなさ過ぎる。健太郎は徐々にこの子をこのまま放っておくのは危険だと考え始めた。その内もつと厄介なことに巻き込まれそうだと深く考えなくても想像できる。

健太郎は今の現状を考え始めた。現在、健太郎は自宅から大学に通っている。学費も親に払ってもらっているため経済的には問題は何もない。親の承諾さえ得れば自宅にて保護することは出来るのだが、問題は両親が海外赴任で長期不在という点だった。年頃の女の子と二人で暮らす。両親がそれに対して何というか、それよりも目の前の千紗が何というかがまず問題なのだが無理を通してでも連れて行かないと不安なことこの上ない。

「なあ、あのさ」

「はい？」

微笑みながら千紗は首を傾げる。そんな仕種を見ただけで健太郎は不安に駆られる。純真過ぎるのだ。これはやはり放っておけないと健太郎は真剣な顔をして千紗を見つめる。

「もしよかったら、俺の家に来ない？」

「えっ？」

疑問の声を出す千紗。よく知らない男から誘われたとあれば当然だろう。健太郎は何とか説得していかないと考えを巡らすが必要性は全くなかった。

「いいんですか！？」

千紗は目を輝かせながら健太郎に詰め寄る。その際に千紗から異臭が漂ってくる。一体どれだけホームレスをやっていたんだと健太郎は呼吸を止めながら頭の中で詰問をする。

「ああ、このまま放っておけないしな」

「ありがとうございます。ありがとうございますっ！」

千紗は凄まじい勢いでお辞儀を繰り返す。しかしその度になびく長い黒髪から異臭が漂ってくる。健太郎は口呼吸で凌ぎながらそのお辞儀を止めるよう千紗の肩を掴む。その掴んだ肩も衣服をしばらく洗っていないためかやや湿っており嫌な感触がしていた。

「そ、それじゃ早く行こう。もう時間も遅いしな」

「はいっ！　これからお世話になります。よろしく願います」
こうして健太郎の家に妙な同居人が住み着くことになったのだっ

た。

第三章 温かい家

第三章 温かい家

健太郎は千紗を伴って自宅まで歩いていたが、考えることが山ほどあった。当人であるはずの千紗は後ろで鼻歌なぞを口ずさみながら歩いている。どこまでマイペースなのだろうかと健太郎は呆れたが、こうして連れてきた以上中途半端にはできなかった。

まずは自宅へ連れて帰った後、とりあえず風呂に入れる。その後、適当にご飯を用意する。そして千紗の部屋も決めてやらねばならない。他にも着替えの問題など様々やることがあった。健太郎はもう明日の学校はこの時点で諦めたようである。

そんなことを細々考えていると健太郎の家へと到着した。もともと自宅近くの公園での遭遇だったので、そんなに距離はない。

健太郎がポケットを探り、鍵を探していると千紗は家を見上げて感嘆の声を上げていた。

「ほわ。大きなお家ですねえ。こんな家は私の田舎にはありませんでしたよ」

大きな家といっても二階建ての家なのだがと健太郎は苦笑する。周りを見ても二階建ての家などざらにある。どれだけ田舎なんだと健太郎は思ったが、口には出さない。先ほど年齢を聞いてしまった時点で失礼だったがこれ以上の失礼を重ねてくなかったのだろう。

「ほら鍵開いたぞ。上がれよ」

「あ、はい。お邪魔します」

千紗は少々遠慮しながら家に上がる。汚れている自分の体を気にしてなのだろうか玄関でどうしたものかと躊躇している。健太郎は明かりを点けながら千紗に遠慮なく上がるよう促す。

「気にせず上がればいいよ。上がったあとは風呂に直行な」

「お風呂まで頂けるんですか？」

「もうここはお前の家でもあるんだから気にするなよ」

「うううう。重ね重ねのご厚情、どうやって報いれば……」

「とりあえず早く風呂に入ってくれと嬉しいかな、今は」

「かしこまりました！ それでは入ってまいります！」

千紗は敬礼しながら風呂へと向かう。ただのんびりした子というわけでもなく茶目っ気もそれなりにある女の子のようだ。

「さて、そんな千紗のためにカップ麺でも準備しといてあげますか」

新たな家族のために健太郎はキッチンに向かい、食事の準備を始める。自分自身も少々小腹が空いたため二人分の用意である。その二人分の食事を見て健太郎は思わず笑みがこぼれる。両親不在の一人暮らしの生活に彩りが加わったことが嬉しいのであろう。

「なんかこういうのっていいな」

二人分のカップ麺の蓋を開け、お湯を沸かし始める。すると風呂場の扉が開く音が聞こえてきた。

「健太郎さくん。私、シャワーって使ったことないんですけどどうすればいいんですかあ？」

千紗は風呂から健太郎に助けを求めてきた。シャワーを浴びるの思ったより時間がかかりそうだと感じた健太郎は火を止め、風呂場に向かう。

「今、入っても大丈夫か？」

開けた途端に悲鳴では困る健太郎は中にいる千紗に確認をとる。

「えっ？ 大丈夫ですよ？」

いまいち釈然としない返事だったが記にせず健太郎は中に入った。だがそんな健太郎の隣にはバスタオルがしっかり掛かっていた。

「シャワーはその……。おわあっ!？」

風呂場に入り、シャワーの使い方を説明しようとした健太郎は目の前の光景に思わずのけ反り、驚きの声を上げた。

「お、お前大丈夫って言っただろうが」

健太郎の目の前には素っ裸の千紗が立っていた。一応片手で両胸

を隠し、もう一方の手で股間を隠しているのだが、どうやら千紗はかなりスタイルがよろしいようで完璧には隠し切れていない。

「えっ？　ですから大丈夫ですよ？」

千紗は何かおかしいところがあるのだろうかと自分の体をあちこち見回している。どうやら本気で言っているらしいと悟った健太郎は娘に説教する父親のように千紗に訓示を述べ始める。

「いいか、千紗。男に不用意に裸を見せちゃ駄目だ」

「だから隠してますよ」

「バスタオルが外にあるだろ。それに風呂場の中にもタオルあるし」

「ああ、それで隠せばよかったんですね。気付きませんでした」

「いや、普通そうするでしょ」

何だかどつと疲れた健太郎は手早くシャワーの使い方を教えると風呂場から出た。

まだ十代の少年にはあの体は些か刺激が強すぎる。

「あっ、そういうええあいつの着替えを出してやらなきゃ」

千紗が着ていたあんな汚い服では風呂に入った意味がなくなる。

そう思い至った健太郎は自分の部屋に服を取りに行く。適当に見繕い、ワイシャツとジーンズを持ってきた。下着は母親の物を拝借してきた。

「くそっ。母親の下着を持ち出す息子になるなんて……」

何だか世間的に見てイタイやつになった感がしていた健太郎だったが、緊急事態という風に言い聞かせる。

急いで風呂場に戻るが、既に脱衣場にシャワーを終えた千紗がいるようだった。

母親のタンスから下着を持ち出す勇気を振り絞っている間に時間が結構経っていたのだろう。今回も嫌な予感がしたので健太郎は念には念を入れて確認をとる。

「今は大丈夫か？　着替えを持ってきたんだが」

「あっ、ありがとうございます。大丈夫ですよ」

大丈夫と言われても不安が残る健太郎は更に念を押す。

「バスタオルは使ってるな？」

「使ってますよ」

ここまですれば大丈夫と健太郎は扉を開けたが、それでもどこかに不安があったのか少しだけ開けて中に服だけ入れようとした。しかしその隙間からはまたしても裸の千紗が僅かに見えていた。

「だから全然大丈夫じゃねえだろうが！」

健太郎は急いで扉を閉める。しかし見えてしまった事実は変わらない。健太郎の頬はあっという間に赤く染まる。

「バスタオル使ってますよ？」

千紗はさも聞かれたとおり答えたと言わんばかりに言う。

「拭いてるだけだろうが。体に巻けて言ってるの！」

恥ずかしくなった健太郎はそれだけ言い残し、風呂場から離脱していく。このまま議論していると裸で出てきかねない。そんな嫌な予感を感じた健太郎は当初の予定を遂行しようとキッチンへ向かう。

「巻けばいいんですか？」

扉を開ける音と共に千紗の質問の声が聞こえる。健太郎は勝ったとガッツポーズをしながらキッチンへ入っていった。

数分後、キッチンには健太郎と千紗の二人の姿があった。二人は神妙にしながら椅子に座っている。目の前のテーブルには二つのカップ麺が並んでいる。既にお湯が入り、蓋の透き間から温かそうな湯気が漏れていた。

「これ wait っている時間って長く感じるんですよ。ああ、まだかなあ」

三日間何も食べていない千紗は目を輝かせながら出来上がりを待つ。透き間から漂ってくる美味しそうな匂いについつい鼻を反応させてしまう様子が微笑ましい。

一方の健太郎は久しぶりにテーブルを一人以上で使うということに言いようがない感慨を感じていた。確かに誰か友達とご飯を食べることはあるが、大学ともなると友達の住んでいる場所もそれなり

に広がりを持ち、なかなか近くに住んでいない。そういうわけでご飯を食べる際には外で食べることになるので自宅の食卓を誰かと囲むというのは久しぶりのことだった。

「まあずっと眺めてても仕方ないし。ほらお茶でも飲め」

「あっ！　ありがとうございます。喉もすごい渴いてたんですよ」

千紗はお茶を受け取るとすごい勢いで飲み干していく。これだけ美味しそうに飲んでもらうとただ沸かしたただけだが、何だか嬉しくなってくる。健太郎は少し微笑みながらその様子を見ていた。そして今更ながら千紗をはっきり眺めたことに気付く。

最初会った時は暗がりによく見えなかった。それ以降もバタバタしていてなかなか正面向いて千紗を見ることがなかった健太郎はじっと千紗を見つめる。

長い黒髪は艶やかで美しい。ややタレ目気味の目が可愛く、まさしく美人といえる女の子である。背もなかなか高いようでスタイルの良さは先ほど確認した。よく考えるとこんな美人と二人きりなんだと意識してしまった健太郎はまた頬を赤く染めてしまう。

「ど、どうしたんですか？　そんなに私をじっと見て」

健太郎の視線に気付いた千紗も頬を赤く染める。気付かれたことにバツが悪くなった健太郎はますます顔を赤くしている。

「そ、そろそろ出来上がったかなあ」

必死で健太郎はごまかそうとするものの、かなり苦しい。だが同じく気恥ずかしい千紗はそれに便乗して空気を換えようと努める。

「そ、そうですね。もうそろそろですかね」

二人で揃って時計を見る。するともうすぐ三分を迎えるところだった。そうなるかと極限までお腹が減っている千紗は気恥ずかしい雰囲気などすぐに忘れ、カップ麺へと視線を移す。

残り数十秒の微妙な時間がもどかしいらしく蓋を開けてしまいそうになるが、どうせならおいしく食べたいと我慢する。だが、待ちきれないといった感じに千紗は落ち着きがなくなっていた。そんな光景を見ていると健太郎も気恥ずかしさなど忘れて笑っていた。

そうこうしている内にとうとう待ちに待った三分が経った。千紗は勢いよく蓋を開け、割り箸を割る。だが律儀な性格らしくいきなりがつついたりはせずに手を合わせる。

「いただきます」

そう言っただけ千紗は動きを止める。どうしたのかと健太郎は千紗の様子を窺う。

「健太郎さんも言ってくれないと食べられないんですけど……」

「あつ、すまん。いただきます」

律儀な千紗がこのままでは一向にご飯にありつけなくなってしまったので、健太郎も急いで手を合わせる。それを見ると千紗は安心して食事に入る。やはり極度の空腹だったためそのペースは速く、健太郎をも凌ぐほどだった。

「す、すごい速さだな……。まあ無理もないが」

「ふぁ？ ふぁんでふか？」

「ああ、いい。気にするな。存分に食べてくれ」

口に麺を入れたまま疑問の顔を向けてくる千紗に健太郎は気にせず食べるよう促す。幸せそうに食べる千紗の邪魔をするのが憚られたのだろう。

一心不乱に箸を動かし続ける千紗はどんどん麺を口に放り込んでいく。そしてあっという間にカップ麺一つを平らげてしまった。丁寧に箸を置き、手を合わせる。

「ごちそうさまでした」

ごちそうさまでしたと言いはしたものの、千紗の表情は物足りないといった感じである。それでも恥ずかしいのかそれとも遠慮しているのか、もじもじしながら落ち着かない。

それに気付いた健太郎は未だ自分の手元にあるカップ麺を眺める。およそ半分ぐらいは残っているようだ。健太郎は自分の腹と相談し、もういいかと結論を出した。

「なあ、千紗」

「あつ、はい、何ですか？」

「俺もう腹一杯になっちゃったんだけどお前はまだ余裕あるか？」

「はい！ 余裕あります！」

千紗は思わず立ち上がりながら肯定する。その目は輝き、口の端からは涎がわずかに垂れていた。先ほどまでもじもじしていた人物とは思えないほどの変貌ぶりである。

「それじゃもしよかったら俺の分食ってくれないか。勿体無いしな」
「はい！ 責任もって食べさせていただきます！」

千紗は立ち上がったまま敬礼をする。顔には満面の笑みが浮かんでおり、心底嬉しそうな様子がありありと伝わってくる。

健太郎がカップ麺を千紗に渡そうとすると千紗は宝物でも扱うかのように両手で丁寧に受け取る。

「ありがとうございます。それではいただきます」

再び両手を合わせ、千紗はカップ麺に箸をつける。まだ温かさが存分に残っている麺を千紗は美味しそうに食べ始めるのだった。

食事を終えた二人はカップ麺の残骸を綺麗に洗い流し、ゴミ箱に捨てて処理を終えた。そうしているともう時刻は深夜十二時になるうとしていた。

健太郎はシャワーで簡単に体を洗い流し、寝る準備を始めようとしたが、ここで問題が起こった。

「お前の寝るところをどうしような」

健太郎は千紗の寝る場所をどうしようと考え始める。常識的に考えて健太郎の部屋というのは除外だった。年頃の男女が同じ部屋で寝るというのは健太郎には気恥ずかしすぎる。

だからといって両親の部屋を貸すのも問題がある。本人のあずかり知らぬところで勝手に他人に部屋を使われるというのはいい気持ちがないだろう。

そう考えていくと残るのはリビング、書斎、物置と化している空き部屋しかなかった。書斎は父親のテリトリーに属するのでこれも却下である。

「あの、私はどこでもいいですよ。なんならお風呂でもどこでも」
おずおずと千紗が提案する。やはり居候という身分であるため相当遠慮しているようである。

「いや、風呂って寝れないし。うーん、そうだなあ……」

健太郎は頭を捻る。どう考えても選択肢が自分の部屋に絞られてくる。リビングも選択肢にあるが、ソファーやらなんやらどかさないと布団を敷く空間がない。非常に面倒だった。

「俺の部屋ぐらいしかないんだよなあ。それはちよつとまずいよな」
「あの、健太郎さんさえよろしければそれで……」

「えっ？」

千紗の提案に健太郎は固まる。まさか年頃の女の子の方から男の部屋で寝たいと言いつ出すとは思ってもよらなかった様子である。

「私、故郷では家族皆で同じ部屋で寝てたので……。こっちに來てからはずっと一人で寂しかったんです」

「……そうか」

「ですから健太郎さんさえよろしければ一緒に……」

「わかった。一緒にの部屋で寝るか」

腹を括った健太郎は千紗の提案を受け入れる。一ヶ月もの間ずっとホームレスとして一人で生きてきたであろう千紗のことを考えるとそれでも別の部屋で寝るとは言えなかった。

健太郎は物置と化した空き部屋から布団を取ってこようと移動し始める。二階にあるのは空き部屋と健太郎の部屋であるため持ち運びは容易である。だが、それ以外に気に掛かることがあった。

「あんまり掃除してないからなあ。布団は大丈夫かな」

しばらく掃除していない空き部屋はあまり綺麗な状態とは言えない。押入れに入っているとはいえ、そんな部屋に放置されている布団が大丈夫かは断定できなかった。

「私なら大丈夫ですよ。今まで路上で生活していたんですから」

健太郎の後ろを歩いている千紗が暢気にそう言うが、健太郎個人としては女の子を清潔ではない布団に寝かせることなど出来ない。

階段を上がって、空き部屋の前までやってくると健太郎は徐に扉を開ける。

部屋の中は少々埃っぽかったが、荒れ果てているわけではなかった。見たところ変な虫がいることもない。健太郎は使わなくなった椅子や机などの間をすり抜けながら押入れまでたどり着く。

健太郎が押入れを開くと、中には布団がしまわれていた。見たところ特に汚れていたり、埃っぽかったりはしないがダニが住み着いていないとは言い切れない。やはりこんなものに寝かせるわけにはいかないと健太郎は布団を出すことを断念する。

健太郎は押入れを閉じ、部屋を出ようと向き直る。その行動に疑問の表情をしている千紗に健太郎は説明を始める。

「まあダニとか住み着いてるかもしれないし、布団を今日今すぐ使うのは無理っぽいな」

「そうですか。それじゃあ、どうしましょう？」

千紗は首を捻って考え始める。健太郎としてはこんな埃っぽい部屋にあまりいたくないので千紗に出るよう促す。

「まあ今日はお前が俺の部屋のベッドを使っているよ。俺はリビングのソファで寝るから」

「いえっ！ 私がソファで寝ますから。健太郎さんはベッドで寝てください」

健太郎に背中を押されながら、千紗は大袈裟に遠慮の意を表す。

だが健太郎も男として女の子をソファなどで寝かせるわけにはいかないと引く姿勢など微塵も見せない。こうなると二人による遠慮合戦は際限なく発展する様相を見せ始めた。

「いいや！ 女の子をソファなんかで寝させるわけにはいかないよ」
「それを言ったら家主を差し置いて居候がベッドで寝ることなんて出来ません」

「今まで路上で寝泊りしてたんだろ？ ベッド使えって」

「路上で寝泊りしてたからこそソファでも十分です」

全く収集する様子を見せない遠慮合戦、譲り合い合戦。ただこの

ままでは埒が明かないと双方とも悟り始め、着地点を見出そうとし始める。

「いつまでもこうしてても仕方がないな……」

「そうですね。私も眠くなってきましたし」

「でもどうするよ。いつそのこと、じゃんけんで決めるか？」

健太郎が公平にじゃんけんで決めようと提案した時、千紗は健太郎を驚かせる大胆な提案をした。

「そうだっ！一緒にベッドで寝ればいいんですよ」

「はあ！？」

健太郎は目を丸くして驚く。同じ部屋で寝るどころの話ではない。一緒にベッドで寝ようと言い出すのだから健太郎の驚きようは尋常ではなかった。

頭の中がエラーを起こしている健太郎の意思を置き去りにして千紗は健太郎を伴い部屋へ向かおうとする。

「それじゃあ行きましょう。よく故郷では弟と一緒に寝てましたから何だか懐かしい気分です」

楽しそうに健太郎の部屋へ向かう千紗に健太郎は引きづられるままである。

「この部屋ですね。それじゃあ、お邪魔します」

千紗は相変わらず健太郎を引きづり、部屋の中をずんずん進む。

そしてベッドの前まで来ると健太郎をベッドに横にし、自らもその隣に横になる。

健太郎は未だ衝撃から立ち直れず、呆けたままである。まだ彼女も出来たことのない十代の初心な少年に女の子と一緒にベッドで寝るというのは刺激が強すぎたのであろう。

千紗は丁寧に掛け布団を掛け、柔らかいベッドの寝心地を存分に堪能している。部屋に入った時点で電気は点けていないため、消しに行く必要はない。もうあとは寝るだけである。

「こんなに柔らかいお布団で眠れるなんて夢にも思いませんでした。幸せです」

「……」

幸せそうにベッドに包まれている千紗の隣で健太郎は固まっている。もうその表情は真っ赤でまるで高熱で動けない重病患者のような体である。

「ふぁ……。何だか突然眠くなってきました……」

柔らかい感触に寝心地の良さを感じた千紗は強い睡魔に襲われ始めていた。その睡魔は圧倒的な強さであっという間に千紗の意識を深い眠りの中に誘い込む。

「もう……。駄目です……。おやすみなさい、健太郎さん……」

睡魔に完全に連れて行かれた千紗は眠りの世界に落ちた。

一方で機能停止している健太郎もまた無意識の内に極度の緊張から逃げようとしてか眠りの世界に落ちようとしていた。半ば落ちかけている意識の中で健太郎は最後の力を振り絞り、千紗に背を向けるように体勢を変えた。その行動の直後、健太郎は深い眠りの中に落ちていった。

第四章 新たな生活

第四章 新たな生活

翌朝、目覚めた健太郎の前には見慣れた自分の部屋、私物があつた。ただ違うのは背中に当たる柔らかい感触と体温だ。健太郎の後ろでは千紗が小さな寝息を立てながら眠っている。

健太郎が時計を見ると、もう一時間目の授業など間に合いそうもない時間だった。もつとも昨日の出来事もあつて学校に行く気などすっかり失せてしまっていたのだが。

すっかり目覚めた健太郎は余程柔らかいベッドでの寝心地がいいのか目覚める気配のない千紗を残し、部屋を出た。寝間着のまま洗面所へ向かい、顔を洗う。冷たい水でわずかに残っていた眠気を消滅させると健太郎はキッチンへと向かう。

健太郎はお湯を沸かし、パンをトースターにセットして朝食の準備を始める。それらが動いている間に自らはマグカップにインスタントコーヒーを用意し、冷蔵庫からミルクを出す。沸かしているお湯はついでに茶を作るのも兼ねているためそれなりに沸騰まで時間がかかる。その間に健太郎は新聞受けから新聞を取り出し、ざっと目を通す。これらが健太郎の朝の日課だった。

トーストはまだ時間がかかりそうだなとトースターを覗き込んでみると、階段を下りてくる音が聞こえてきた。

「ふああああああ……。おはようございます」

寝惚け眼でキッチンに入ってきたのは千紗だった。目を擦りながらふらふらと頼りない足取りで健太郎の近くにまでやって来る。

「おはよう千紗。よく眠れたか？」

「はい、あんなに気持ちよく眠れたのは久しぶりでしょうか」

「お前、ちゃんと起きてるか？」

「起きてますよ」

間延びした声で話す千紗はどうみてもまだ半分夢の世界に足を突っ込んでいる状態だった。それでもトーストの香ばしい匂いを嗅ぎつけた千紗は決して恋しい布団に帰ろうとはしない。キッチンのテーブルに陣取り、椅子にすっかり着席していた。

「お前もトーストでいいか？」

しょうがないので千紗の分も作ってやろうと健太郎は千紗にトーストでいいか尋ねる。もし朝は和食という習慣があったなら電子レンジで出来るご飯があるが、そちらは夜に面倒くさい時に使いたかったので健太郎はトーストを勧める。

しかし千紗の反応は健太郎の予想を超えたものだった。

「えっ！？ 朝ご飯があるんですか？」

「はい？」

健太郎はそう言ったきり絶句した。朝ご飯を食べないという若者はけっこういるが、朝ご飯があるのかと問われることはあまりない。しかし三日間も絶食していた千紗の境遇を思えば無理もない話だった。

しかしホームレス生活の間に朝ご飯があることを驚くようになるとは思うと健太郎は背筋に寒気が走った。出来ることならそんなことは人生で一度たりとも経験したくないものだ。

健太郎は気を取り直して袋からパンを取り出し、トースターに入れる。そうこうしている間にお湯もいい具合に沸いてきそうだ。

「お前は どうする？ コーヒー飲むか？」

「いいんですか？」

「もうここはお前の家でもあるって言っただろ？ 遠慮するなよ」

「それではお言葉に甘えていただきます」

「うい、了解」

注文を受けた健太郎はもう一つカップを出すとコーヒーを入れる準備をする。

「そういえば親父達に一度連絡しとかないといけないな」

千紗の分のコーヒーを作りながら、思い出したように健太郎は呟

く。さすがに自分一人の家ではないので家主たる両親の承諾なしで勝手に人を住まわせるわけにはいかない。もし許可が得られなくても健太郎としては強引に千紗を住まわせるつもりではあるのだが、一応形式上けじめはつけたかった。

現在午前九時過ぎ。平日のこの時間帯では父親は出勤しており、海外の家には母親しかいないだろう。

「夜になって親父が帰って来てそうな時間を狙って電話するかな」
健太郎はそう方針を決め、思考を終了する。息子たる自分から見ても話が通じない頑固な親だとは思えないので恐らく承諾の返事が返ってくるだろう。健太郎が考えを簡単にまとめ終えられたのもこうした信頼があるからこそだった。それに第一、息子を一人暮らしさせて自分達は遠い海外で暮らしている点である程度の信頼を寄せていると判断することも出来る。責任さえ持てれば自由を許してくれているということだろう。どちらにしろ最悪なケースには至らなさそうではある。

健太郎が千紗の分のコーヒーの準備と両親への連絡事項についてのまとめを終えるとタイミングを見計らったかのようにお湯が沸き、トーストが出来上がった。

健太郎は皿を出してトーストを載せていき、マグカップにはお湯を注いでいく。そして注ぎ終わったやかんには麦茶のパックを落として茶を作る。これで朝食の準備は完了した。

健太郎は千紗の隣の席に座ってコーヒーをかき混ぜる。それに倣って千紗もコーヒーをかき混ぜ始める。昨日の晩にも感じたことだが、隣で誰かが一緒に食事をするというのは久しぶりだった。特に朝食時に友人と食べるということは夕食、昼食に比べて頻度は限りなく少ないので健太郎には尚更久しぶりに感じられた。

「それじゃいただきますか」

健太郎がそう切り出すと千紗は昨日のように手を合わせ、きっちり挨拶を行う。

「はいっ。いただきます」

「いただきます」

健太郎も千紗に倣って手を合わせて礼儀正しく朝食に臨む。一人で食事をしているとなかなかしない行動だけに新鮮味があった。だがこれも千紗と生活をしていく以上普通のことになるのだろうと考えると健太郎はこれからの生活に大きな変化が起こりそうで実に楽しみであった。

「朝食終わったら何をしような。もう学校は諦めたし……」

「学校行かないんですか？」

「ああ、中途半端な時間だしな。それよりもやることが他にもある」「やることって何ですか？」

「物置の整理、お前の日用品の買出しとか色々あるな」

「それでも学校には行かないと駄目ですよ」

千紗は真面目そうな顔で健太郎に注意をする。見るからに優良な生徒であっただろうと思わせる風貌だけにある種の説得力がある。それでも穏やかな雰囲気それが緩和し、強制力は著しく低下していた。これが眼鏡をかけたたりして委員長然とした容貌だったら健太郎も少しは考える余地があっただろう。

「今日休んでも他の日に頑張れば取り返しがつく。大丈夫」

健太郎は考える素振りも見せず、千紗の言葉を聞き入れない。やはり穏やかな雰囲気千紗では首を縦に振らせるだけの迫力に欠けていた。

「そうですか。それなら大丈夫ですね」

そして何より千紗の押しが弱く人の言葉を受け入れがちなため全く議論、口論にならない。簡単に健太郎の言葉に納得した千紗はもう自主休校のことを頭から追い出していた。

「朝食の後は何から始めましょう？」

「そうだな……。まず整理整頓してから必要な物を考えていこう」

「わかりました」

千紗は健太郎の言葉に頷き、トーストを小さな口で食べていく。喋りながらもトーストを食べ、コーヒーを飲んでいた健太郎とは違

い、千紗は同時に二つの行動が出来ないのかトーストがまだ大分残っていた。

早くもトーストを食べ終え、ゆっくり残りのコーヒーを飲み干そうとする健太郎を見て食べるスピードを上げる千紗。

「もぐもぐ……。うんっ!? けほけほっ!」

急いで食べ過ぎたのか喉に詰まらせてしまう千紗を見て健太郎は苦笑する。

「あまり急がなくていいぞ。久しぶりの朝食なんだから味わって食べればいい」

苦しみながらも何とかコーヒーを流し込み、窮地を脱した千紗は健太郎の言葉に無言で頷く。

マグカップを置き、一息つくと再びトーストを食べ始める。今度は急ぐことなく味を噛み締めるかのようにゆっくりと咀嚼する。徐々に徐々に量が減っていくトーストを見て健太郎もコーヒーを完全に飲み干し、食事を終える。それに遅れること数分で千紗も食事を終えた。

朝食を食べ終えた二人は二階に上がり、物置と化した部屋に入る。

「やっぱり汚いな。やる気が一気に失せてくる」

目の前に広がる惨状に健太郎は脱力していた。埃が積もったりして汚いこともそうだが、いらぬ物が入っていたりするのでそれらを片付けるのに結構な手間が掛かりそうなのがやる気をなくさせていた。

「私一人でやるから大丈夫ですよ。無理しないで下さい」

千紗が健気に健太郎を気遣う。普通は男が格好良く女の子に言っでやりたい言葉なのだが、それを逆に言われてしまった健太郎は立場がなかった。

そしてそんなことを言われた以上、そのままそうかと受け入れるわけにはいかない。健太郎は握り拳を掲げ、やる気をアピールし始める。

「いや、ここは男手が重要だ。俺に任せとけ!」

「おおっ、健太郎さんすごいやる気ですね。私も負けていられませんか！」

気合の入った二人はすぐに掃除に取り掛かる。何も言わなくても意思の疎通が出来ているのか健太郎は真っ先に今は使われていない椅子に向かい、千紗は押入れを開けて布団を取り出す。力仕事は健太郎、掃除方面は千紗と役割分担が自然に出来ていた。

健太郎は椅子を一脚だけ残してそれ以外は庭へと運び出す。続いてテーブルを引っ張り出してこれも庭へと運んでいく。階段を上り下りするので結構な重労働だったが、物が大きいこともあってあっという間に空間が開いて成果がよくわかる。

一方の千紗は布団のシーツを外し、それを風呂場に持って行く。そして布団はベランダに干す。ここまでは至って普通の行動だったが、次に千紗のとった行動は健太郎を呆れさせるのに十分なものだった。

千紗は再び風呂場に向かい、何故か服を脱ぎ始める。そして下着姿になった千紗はシャワーを出してシーツを手洗いし始めたのである。ちっとも洗濯機の動く音が聞こえてこないことに気が付いた健太郎は風呂場へと入っていく。するとそこにはあられない姿でシーツを手もみしている千紗がいた。

不意打ちを喰らった健太郎は凄まじい速度で首を動かし、千紗から目をそらす。

「お、お前は何をやってんだ！」

「えっ？ 何ってお洗濯ですけど」

「そこに洗濯機があるだろうが」

「洗濯機って私の地元にはなかったんですよ。ですからいつい手洗いでやりたくなって」

健太郎は深いため息をついた。洗濯機が普及していない地方ってどんな所だよと言ってやりたかったがその力も出なかった。そもそも手洗いするならするで風呂場の扉を閉めてほしかったし、下着姿というのもやめてほしかった。

健太郎は顔を横にそむけながら器用に千紗からシーツを奪う。そして奪い取ったシーツを洗濯機に放り込み、電源を入れる。続いて洗剤を適量振り掛けて洗濯機内にある引き出しに柔軟剤を入れる。そしてホースを蛇口につないで、水を洗濯機に流し込んだ。それらの一連の動作を眺めていた千紗は思わず拍手をし始める。

「健太郎さんは凄いですね。私はそんなハイテク機器使いこなせませんよ」

「いや、まだそのお前の言うハイテク部分とやらには電源ボタンしか触れていないんだが」

何しろまだシーツを放り込んで洗剤、水を投入しただけなのだから何も操作していないに等しいし、これ以降も特に触れることなどない。せいぜい洗濯終了後蛇口を止めるぐらいだ。勝手に電源も切れるし、使いこなすなんていう言葉は必要なかった。

「その電源ボタンすら私はわかりませんよ」

「書いてあるっつーの」

健太郎は洗濯機の電源と書かれた部位を指差す。

「たいていはこれ押すだけで大丈夫。あとはスタート押すぐらいだな」

「それだけでいいんですか？」

「ああ、他に何かあるか知らんけどたいてい事足りる」

「それなら私でも出来そうです」

「今度からは手洗いするなよ。まあ大事なものもそれでいいかも知れんけど」

健太郎はこれで済んだとばかりに洗濯機から離れて二階へ上がる。うとするが千紗が付いてくる気配がしない。不審に思った健太郎は再び階段を降りて風呂場に向かう。

そこには座り込みながら洗濯機の番をしている千紗の姿があった。

「……。何をやってるんだお前は」

「洗濯機見てない。終わったら止めないといけないし」

「全自動だから勝手に終わる」

その言葉に驚愕の表情を浮かべる千紗を引きずり健太郎は二階へと上がっていく。いちいちこんな面倒を見るのが厄介だった。

「さあ、邪魔なテーブルと椅子を撤去したからだいぶスペースに余裕が出来た。次は何をするべきか」

「洗濯機が……」

「勝手に終わる」

「でももしかしたら水が溢れちゃったり」

「お前が洗濯機の仕事をみてただけだろ」

健太郎は完全に千紗の考えを見抜いていた。本当に勝手に洗濯をして終了するのか見たいのだろう。初めて見る機械の動きを見たい気持ちはわからないでもないが、千紗のための部屋を掃除するのに自分だけが動くということはしたくなかった。

結局千紗を叱咤して整理整頓を進める。まだ洗濯機の方を名残惜しそうに見る千紗だったが、自分の部屋になるということで一生懸命やろうと動く。掃除機をかけ、雑巾がけをし、押入れの整理をする。

そんな千紗の行動を見やり、健太郎は一階へと降りていく。そして電話をかけて、廃品回収を依頼する。これで庭に広がった不用品の始末が出来る。千紗が来てくれたおかげでいらぬ物を捨てる機会が出来たのだから健太郎としてはその点でも有意義だった。

「しかし結構疲れたな。まあそこまで超重量級の物はなかったから運ぶことは出来たが」

健太郎は酷使した腰や腕を擦る。程よいどころかぐったりするほどの疲労感が体を包んでいる。さすがに一休みを入れたくなった健太郎は時計を見る。現在十二時十五分前。ちょうど昼ご飯のことを考え始めてもいい時間帯だった。

「気が付いたらこんなに時間が経ってたのか。昼ご飯どうしようかな」

健太郎は二階に上がりながら昼からの予定も考慮に入れて考えを練る。千紗のものとなる部屋へ入るともはやそこはかつての姿とは

一変していた。

改めて部屋を眺めると知らない物がたくさんあったものだ。健太郎はしみじみ思う。部屋には小さなテーブルと本棚、そしてタンスが置かれている。他にも細々とあるが、目に付くのはこの辺りだった。生活するには十分な設備である。

健太郎の部屋とはほぼ同じ間取りだが、健太郎の部屋にはパソコンやテレビなどが置かれている。さすがにそれらを設置できるほど経済的に余裕がないのでパソコンに関しては健太郎のもの、テレビはリビングのもので勘弁してもらおうと健太郎は考えていた。

そしてこの部屋の主となる千紗は座布団に座って一休みしている。部屋の中央に置かれたテーブルに上半身を突っ伏し、眠っているように見える。

「おい、千紗。起きてるか？」

健太郎は千紗に呼びかけながら部屋に入っていく。そして千紗の肩を揺らして覚醒させようと試みる。

「ふあ？ あっ、健太郎さん……。あれ？」

上半身をテーブルから起こし、千紗は周囲をきょろきょろと見渡す。どうやら上半身をテーブルに投げ出して休憩していたら気が付かない内に眠ってしまったのであろう。結構な運動量だっただけに疲れていてもおかしくない。

「もうそろそろ昼ご飯の時間だぞ。どうする？」

「あっ、お昼ご飯ですか。お昼ご飯も久しぶりですねえ」

間延びした声で言うが、結構深刻な問題だった。昼だけを抜いていたわけではないので、たまに面倒で昼ご飯を食べないということとは全然意味合いが違っている。

「お前にとっては更に久しぶりのことかも知れないが外食にしようかなと思っているんだが」

「が、外食ですか……」

健太郎の提案に千紗が突然尻込みをし始める。声も小さくなり、ことなく緊張した顔つきをしているのが気になった。

そのおかしい態度に健太郎は当然のごとく疑問の言葉を投げかける。

「どうした？ 何か不都合でもあるか？」

「いえ、その……、私、作法とかよく知らなくて」

「お前はどんな高級料理店に連れて行ってもらえると考えてるんだ？」

あまりに馬鹿らしい不安に健太郎は呆れてしまう。もしかなくても外食をした経験がないのであろう。実際ハンバーグなどでもフォークとナイフを使わずに箸で食べている人もいるし、フォークのみで食べている人もいる。それにファミレスなどではやかましく喋っている学生などもいて、作法など気にする必要はない。誰もそんなところ見ていないだろう。

「心配するな。行くのはファミレスとかその辺りだから作法なんか特にない」

「本当ですか？ 私みたいな田舎者でも大丈夫ですか？」

「とりあえず俺の言うとおりにしてれば大丈夫」

「それなら行ってみたいです」

「よし決定」

そうと決まると健太郎は部屋のことと昼ご飯のことは一時置いておき、一階に下りて洗濯機へと向かう。そして既に洗濯を終了し、電源が切れた洗濯機の蓋を開けてシートを取り出す。脱水作業によってしわくちゃになっているシートを健太郎は伸ばして折りたたむ。庭へと運ぶにあたって伸ばしたままでは下を引きずってしまう。

そんな作業をしていると二階から健太郎を追って下りてきた千紗がシートを見て驚愕する。

「すごい……。真っ白です」

今度は呆けたようにシートにふらふらと近寄る千紗。健太郎は千紗の予想外の行動について動きを止めて見守ってしまう。

「何かすごい匂いがしてきます」

敏感に匂いに反応した千紗が鼻を鳴らす。どうやら洗剤と柔軟剤

の香りが漂ってきたのであろう。健太郎がシーツを左右に振るとそれに反応して千紗が顔を同じように左右に振る。

面白い反応なので健太郎としては続けていたかったが、こうしている間に時間は過ぎていつている。昼ご飯のことを考えると早く洗濯物を干してしまいたい。

左右にシーツを振るのを止めた健太郎はシーツを持って庭まで出る。そして物干し竿にシーツを掛けると洗濯ばさみで左右を止めて風対策をする。これで外出中にシーツが地面に落ちて大惨事になるということとはほぼない。

やるべきことを済ました健太郎は家へ入り、出かける準備を始める。

「おい、お前も出かける準備しろよ。すぐ行くぞ」

「私はいつでも準備万端です」

健太郎の目の前には手ぶらの千紗がいた。まあ確かに居候したての千紗にはそもそも物が無いので仕方がないが。あまりに手軽で健太郎は拍子抜けしてしまった。女の準備には時間がかかるというのが健太郎の考えだっただけに尚更であった。

「まあ、時間がかからないならそれにこしたことはないけどな」

健太郎は財布と家の鍵、預金通帳を鞆に入れて外に出る。後ろから付いてくる千紗を待って玄関の鍵を閉める。そして二人並んで歩き始めた。

「とりあえずお前の最低限の身の回りの物を買わないとな。服とか歯ブラシとか色々な」

「こんなにしてもらえるなんて……。嬉しくて涙が出てきます。うううううう……」

「大袈裟だなあ」

健太郎は苦笑しながらも素直に喜びを表してくれる千紗を見て満足していた。やっぱり女の子が喜んでくれるのは男として嬉しいことだった。それが文句なしの美少女であるなら尚更である。

健太郎は機嫌がよいため細かいところにも気を配る余裕があった。

千紗の歩幅に合わせてスピードを調整するという動作をごく自然にやってみせていた。その気配りに千紗が気付いた様子を見せないことはさらに健太郎の気分をよくさせる。こういうのはさりげないのがよいものだ。

「まずは日用品を買っていか。服とかかさばる物は後回しだな」

健太郎は隣を歩く千紗を見ながらこれからの予定を話す。楽しそうに歩いている千紗は服という単語を聞くなり輝く目で健太郎に迫って来た。

「私、都会の服を見てみたいです！ 可愛い服着てみたいです」

「お、おお。わかった、わかったから少し離れろ。もう俺、壁に当たってるから」

あまりの千紗の勢いに健太郎は道路の脇に追いやられ、民家の壁に密着していた。千紗の言う都会の服というものがどういうものかわからないが、高級な物は容赦なく切り捨てないと家計が危くなりそうだと健太郎は千紗の勢いから判断した。

「まあとにかく昼ご飯行って、日用品、服、食料品かな」

話を服から逸らせようと健太郎は昼ご飯の話を持ち出す。これなら入る店を選べばそこまで大出費にはなるまい。千紗が大量に食べたりすればどうなるかわからないが。

「お昼ご飯ですか！ そっちも楽しみです」

千紗の満面の笑顔に一抹の不安を健太郎は覚えたが、喜んでくれていること自体は純粹に嬉しかった。そうなると多少財布の紐が緩んでもいいかなと思ひ始めてしまうから怖い。まさしく無邪気な魔性の女である。

こんな風にお喋りをしながら歩いていると徐々に車通りが多くなってくる。駅周辺の賑やかな通りは様々な店があつて千紗の目を奪うのに十分なものだった。

「私もしばらくこの辺りに住んでましたけど何故だか怖くて駅の方へは来れなかったんですよ。凄い賑わいですねえ」

「怖いってどういうこと？」

「何か都会って憧れもあるんですけど逆に畏怖の対象だったりするんですよね」

「たしかに都会は恐ろしいとか言ってるのマンガとかであったりするよな」

「まあそういうわけで今回は健太郎さんもいますし、せっくなので満喫したいと思います」

そう宣言するなり千紗は辺りをきよろきよろ見渡し、忙しく動き回る。正直田舎者のおのぼりさんのような雰囲気が見るからに醸し出されているが、せっかく楽しんでるんだからと健太郎は自由にさせておいた。それでも目を離すと迷子になりかねない程はしゃいでいる千紗を見守るのは骨が折れる。

しかし元氣よく動き回る千紗だったが、突然その動きを止めた。どうしたのだろうと近づく健太郎は千紗の視線の先を見つめる。

そこには可愛い衣装で動き回る女の子が料理を運んだり、レジを打ったりしている光景があった。健太郎は視線を上げる。高い位置に取り付けられた看板には有名ファミリーストランの名前が書かれている。健太郎も何度か訪れたことのある店だったが、ここ最近是利用していなかったので一瞬では分からなかった。

記憶にあまり残っていないため味がどうかの情報は乏しいが、有名チェーンということとそれなりの信頼は置ける。千紗も興味を持っていることだと健太郎は昼食の場をここと決めた。

「千紗。ここで昼ご飯食べようか」

千紗はその言葉を待っていましたとばかりに首を縦に振る。

「はい。ここで食べましょう。うー、楽しみです」

「それじゃ入るか」

健太郎は千紗の返事を聞いてファミレスのドアを開ける。続いて入ってくる千紗のためにドアを支えて待っているが、入ってくる気配がない。すぐに移動するはずだったため前向きのまま後ろのドアを支えていた健太郎は不審に思ってから振り返る。

「おいっ、何やってんだ。入らないのか？」

「あの……。何だか緊張しちゃって」

千紗はファミレスのドアにまるで彼女専用の防壁でもあるかのよう
にその場に留まっている。初めて入る場所には緊張してしまうの
は分からないでもないが、先ほどまで楽しみにしていた人間とは思
えないほどの変わりようである。

尻込みしている千紗を健太郎は手をとって引っ張り込む。緊張し
ているだけなので抵抗もなく千紗は店の中へと入ってくる。店の内
部に入るにはさらにもう一つドアを開けなければならないので健太
郎はまた千紗が尻込みしないよう手を握ったままドアを開いた。

「いらっしやいませ！ お客様お二人様でよろしいでしょうか？」

可愛い制服を身に纏ったウェイトレスが健太郎と千紗の前にやっ
てくる。ウェイトレスが話しかけてきただけで千紗は少々錯乱気味
になっていたが、健太郎はそちらを無視して早くことを進めようと
対応する。

「はい。二人です」

「おたばこはお吸いになれますでしょうか？」

「いえ、吸いません」

「それではこちらへどうぞ」

一通りのやりとりが済むとウェイトレスが先導して席へと向かう。
千紗は尊敬の目で健太郎を見つめていた。

「どうした？」

「すごいです、健太郎さん。私だったら慌ててますよ」

「実際隣で慌ててたもんな」

そんなことを話しながらウェイトレスに付いて行くとウェイトレ
スが立ち止まり、手を伸ばして促す。

「お席こちらになります」

「あ、はい」

「ご注文がお決まりになりましたらこちらで呼びください」

そう一通り説明するとウェイトレスは忙しそうにまた動き回る。

健太郎はすぐにメニューを見ようとしたが、またおかしな行動をし

ている千紗が目に入ってしまう。

「……。お前は何をやってるんだ？」

千紗はウェイトレスがこれを使って呼んでくださいと言っていた呼び出しの機械を見ていた。ボタンを押すことによって客が呼んでいることを示すものだ。

千紗はそれを不思議そうにそれを見ていたが、不意にボタンを押そうと手をボタンにかける。

しかしそれをやりそうだと感じていた健太郎はすぐさま千紗の手を横からはたいて死守する。

「痛いです。何するんですか」

「お前こそ何してんだ。押そうとしただろ、今」

「押すとどうなるのか知りたくて……」

「お前は子供か。押したら誰か店の人が来ちゃうんだよ。迷惑だろうが」

「はー、そうなるんですか。納得しました」

好奇心が強いが根は良い子の千紗は迷惑と聞くともう手を伸ばそうとはしない。健太郎に倣ってメニューを開くとすぐに興味はそちらに移っていった。

メニューには様々な料理が載っている。肉料理から和膳、カレー、デザートなどが並ぶのを見た千紗は早速選ぶのに難儀しそうな状態だった。

「たくさんあって選べないですよ」

「まあそう言うと思った。早くしろとは言わんが昼時は混むからな。程ほどにな」

「それって早くしろって言ってるようなものですよ」

困り果てて焦り始める千紗は忙しくページを捲る手とメニューを見る目が動く。先ほどからハンバーグやステーキなどの肉部門とピザなどの軽めの料理が並ぶページを行ったり来たりしていることに健太郎は気付いた。

「どっちとも頼めばいいじゃないか」

「健太郎さん、私のことを常に腹ペコの大食いと思ってるませんか？」
「違うのか？」

「違いますよ。健太郎さんにはデリカシーが足りてません」

「ちっ、田舎者が覚えたての言葉を使いやがって」

「デリカシーぐらい知ってます。田舎出身だからって馬鹿にしてません？」

「はいはい、何でもいいから早く選べよ。席が埋まり始めてきたぞ」
まだ文句が言い足りなさそうな千紗を急かして健太郎は注文を決めさせようとする。今までメニューに集中していた千紗もそこで人が増え始めたことに気付いたのか思い切ってメニューを決めた。

「決めました。私、やっぱりお肉を食べたいのでハンバーグにします」

「よし、それじゃ呼ぶぞ」

そう言って健太郎が例のボタンを押そうとすると千紗がその手を遮って止める。

「何をする」

「これは私の役目です」

千紗は真剣な目で健太郎に訴える。やはりまだこのボタンを押したい気持ちは強いらしく引く気はなさそうだ。健太郎は別にそんなにボタンを押すことにこだわりなどないのでその役目を譲る。

すると千紗は嬉しそうにボタンに手を伸ばす。千紗がボタンを押すと電子音が鳴り、程なくウェイトレスが注文を聞きにやってきた。
「ご注文をどうぞ」

オーダーを打ち込む準備してウェイトレスは注文を促してくる。

「はい。イタリアンハンバーグをお願いします」

ボタンを押して店員を呼ぶ時には興奮していた千紗だが、いよいよ注文をするに至るとトーンダウンしてしまう。やはり慣れないことの上に相手が絡むと緊張をしてしまうのだろう。

「おい、千紗。単品でいいのか？ ライスとかいらんのか？」
「えっ？」

注文を終え、一仕事終えたといった風の千紗に健太郎は尋ねる。
さすがにハンバーグだけを食べるというのはバランスが悪いと思っ
たのであろう。

何を言ってるのかと言わんばかりの顔で千紗は呆けている。そんな千紗に健太郎はメニューを見せて説明を始める。

「セットで何か付けるなり何なりしないとハンバーグだけになるぞ」
「えっ、ご飯とか付いてこないんですか？」

「定食じゃないんだから」

「ああ、どうでしょう!？」

慌てる千紗は横に置いていたメニューを再び捲ってオーダーを練り直す。

「おいっ! 落ち着け、反対反対!」

「えっ? あれ、あれあれ?」

慌てているせいかメニューを天地逆様に持っている千紗に健太郎は落ち着くように言うが、既に冷静さを欠片すら失くしている千紗には無意味だった。落ち着くよう言われた千紗は却って焦りを増し始める。

「あの……オーダーは如何なさいましょう?」

イタリアンハンバーグのみを打ち込んだまま所在無く立ち尽くしているウェイトレスが恐る恐る尋ねてくる。徐々に客が増してきている店内だけにいつまでも健太郎達に時間を費やしている場合ではないのだろう。

「あ、はい。すみません。それじゃあ、えーと……。ミートドリアで」

「はい、かしこまりました。それでこちらのお客様は如何なさいましょう?」

未だにメニューを持ったまま慌てふためいている千紗の方を見てウェイトレスは困った表情をしてしまう。どうやら他の店員から早くオーダーを受け付けて、次に回れと指示をされているのだろう。

仕方ないと判断した健太郎は困り果てる千紗を尻目に自らメニュー

ーを捲ってウェイトレスに千紗の分も注文してしまおう。

「それじゃこっちにはライスセットをお願いします」

「はい、かしこまりました。それでは確認させていただきます」

助かったという表情で最後のオーダーを打ち込んだウェイトレスは画面を見ながらオーダーの確認をし始める。特に問題はないため健太郎が大丈夫と伝えたとウェイトレスは一礼し、次のテーブルへと忙しく動き回る。

「はううううう……。店員さんに悪いことをしてしまいました……」

「まあ、初めてファミレス入ったんだろ？ 仕方ないさ」

それでも注文ぐらいであんなに慌てないでほしいと思うところもあったが健太郎は言わないことにした。初めてのファミレスを落ち込んだ気分で体験してほしくなかったからだろう。やはり飲食は楽しくしたい。

「それよりお前の故郷ってファミレスとかないのか？」

「えっ？ ……そうですね。私の故郷はすごい田舎ですから」

「何があるんだ？」

「見渡す限り山とか田んぼ、畑ですね。こことは正反対のような感じですよ」

「自然たっぷりで良さそうな所じゃないか」

健太郎は本当にそう思っていたが、千紗の表情はそれは違うと言わんばかりである。

「都会に住んでいる人はそう思うんですよ。ですが実際にそこにずっと住むとまた違いますよ」

「そんなもんかね。でもまた何で思い切って田舎を出てきたんだ？」
健太郎はそう言えば田舎を出てきたと聞いたが、深く理由は聞いていなかったと思って質問を試してみた。家に住まわせているんだからそれぐらいの権利はあるだろう。

「理由ですか？ それは……」

「あつ、言いたくないなら言わなくても……」

もし話したくない事情があるなら話さなくてもいいと健太郎は言おうと思っていた。少し間があったことに反応しての言葉だったが、それを言い切る前に千紗は理由を口にし始めた。

「それは……どうしても都会を見てみたかったからです」

「……。はい？」

健太郎は疑問と呆れの表情を隠せない。もっと深刻な事情があるのかと思えば単に都会を見てみたかったからだと言う。そんな単純な理由で都会に出てくるだろうか。

「本当にそれだけ？」

「はい。それだけです」

健太郎はさらに確認するが千紗の答えは変わらない。あまりの無鉄砲、無計画、能天気さに頭がくらくらしてきた。よく言えば度胸があつてバイタリティ溢れる女の子だと言えるのだが、その挙句にホームレスになつていては話にならない。改めて健太郎は千紗を保護して正解だったと確信した。

「私、高校まで出たんですけど田舎なので少し離れた町の高校に通っていたんですよ。そこは私の田舎とは比べ物にならないほど発展していました。そこから都会に対する憧れが出てきたんです」

千紗の話に健太郎は共感し難いものがあつたが、そんなものかと思つて聞いていた。健太郎自身は生まれも育ちも都会と言われる所のため無理もない話しだった。

「それでもその町もここから見れば十分田舎なんですけどね」

「まあとにかくその町が千紗の憧れの原点なわけだな。それで千紗の通つてた高校の近くにはファミレスとかあつたのか？」

「わからないです。私、家が遠かったし、家に帰ったら家事とかの手伝いしてましたから」

千紗は何でもないことのように話すが、健太郎は信じられないといったような表情である。

確かにたまに家事の手伝いすることはあつたが、高校生の時は主に友達とつるんでいたり、部活をして放課後は過ごしていた健

太郎には想像も出来ない。

「それを毎日か？」

「はい。それでも私が高校を卒業する少し前に友達から貸してもらった雑誌を見てたら聞かれたんですよ」

「何を？」

健太郎は誰に、何をと要旨を大分欠いた千紗の話しに思わず身を乗り出して聞く。

説明足らずの言葉も関係によっては苛々させることもあれば逆に興味を煽ることもある。そういう点で健太郎にとって千紗はすっかり心地の良い人になっているのだろう。

興味を示してくれることが嬉しいのか千紗は健太郎の質問に微笑みながら答えた。

「お母さんとお父さんが都会に興味があるのかって」

「やっぱり親としては子供の興味は知りたがるよなあ。俺のとも好きな子はいないのかとかよく聞いてきたからな」

「私です。農家ですから跡継ぎが気になるみたいで」

「それでも都会に興味があるのか聞いてきたのか。普通だったら押し止めたいだろうに」

「二人とも優しいですから……。それで私が興味があるって言ったら、今度は都会に出たいかって」

「すごい答えづらいな、それ」

「でも二人の顔が真剣だったから素直に言いました。出てみたいって」

「それで出てきたらホームレスになっちゃったわけか」

そう言われた千紗は恥ずかしそうに頭を摩っている。既に初めてあった際に公園で話したように詐欺に遭った上に詐欺と気付いていなかったのだから無理もない。

「でもそんなことになったんだったら実家に連絡するなりすればよかったじゃないか」

健太郎はごく当たり前のことを言う。身寄りがないならともか

く実家があるのだから助けを求めればよい。

「出来ないですよ。あんなに優しく送り出してくれたのにすごすご帰ってくるなんて」

千紗は俯きながら小さく言う。罪悪感と恥ずかしさなど様々な感情が渦巻いているのだろう。

「実家と連絡は取ってないのか？」

「ここ最近はホームレス生活でそんなこと出来ませんでしたから」

「まあ、そりゃそうだよな……」

健太郎はまるで自分のことであるかのように悩んでいる。現状自宅に電話があるのだから千紗は両親と連絡を取ることは出来る。しかし今の状態を両親に話せばすぐ戻ってくるように言われるだろう。人様の家に入りこんで、厄介になっているのだからそうするのが普通である。

千紗が今後どうしたいのかわからないが、健太郎としてはお別れになるのは寂しいと感じていた。夜の公園でゴミ箱を漁っているのを見つけたという微妙な出会いの上にまだ丸一日も経っていないというのに千紗の存在は確かに健太郎の中で大きなものになっていた。それはやはり未だ慣れない一人暮らしという状況が大きく作用したのだろうが、健太郎と千紗の相性が良いことも一因となっているようだ。

「とりあえず家には電話あるけど……。連絡取るか？」

健太郎は複雑な心境のまま千紗に連絡を取るか尋ねる。

その問いに対して千紗は少し悩みながら上目遣いに健太郎を覗き込む。

「あの……お尋ねしますけど、健太郎さんは今の状況は迷惑でしouxか？」

「い、いや、俺はちっとも迷惑じゃないぞ」

健太郎は思いがけない質問に少々慌てながら答えを返す。だがこの質問に健太郎は希望を見出し始めていた。

「私は健太郎さんさえ許してくれるなら、このまま居候させてほし

いです」

自分の望んでいた答えが千紗の口から発せられたことに健太郎は固まってしまう。普通に考えれば連絡を取って、それで地元へ帰ってしまうだろうと思っただけに衝撃は大きかった。たとえその前の質問に光明を見出したとはいえ、千紗が真面目な性格だけに可能性は低いと思っていたのである。

驚きと嬉しさに固まっている健太郎を余所に千紗は続けて話し始める。

「やっぱり私の望みを許してもらって来たわけですし、苦い思い出だけを残しては帰れないです。楽しんで見聞を広めて色々して出て来た甲斐があったって言えるようにしたいんです」

「……」

「わがままだってわかっています。それでもここにいたいんです。どうかこれからも残らせてはもらえないでしょうか？」

千紗はそう言い切ると頭を下げて健太郎にお願いをする。その行為で我に返った健太郎は周囲の目もあるため、とりあえず千紗の頭を上げさせなければと慌て始める。

「ち、ちよつと千紗。頭上げろって。大丈夫だから」

「いえ！ 私の誠意が通じるまで上げるわけにはいきません。私は本気なんです」

「通じてる通じてる！ だから、なっ。頭上げろって」

「……本当ですか？」

「ああ、俺だってやっぱり一人暮らしは何だかんだ言って寂しかったし」

その言葉を聞くと千紗は頭を上げて今度は涙を流し始める。

「お、おい。何泣いて……」

「う、嬉しくて。私、すごいわがまま言ってるのに……。それを聞き入れてもらえるなんて」

しゃくり上げながら千紗は涙を拭く。周りからの好奇の視線が気になったが、今はそれどころではない。健太郎は千紗を落ち着かせ

ようと優しい言葉をかける。

「大丈夫。わがままじゃないって。だから泣き止めよ」

「は、はい……。すみません……。取り乱しちゃって」

健太郎はようやく笑顔を見せた千紗に安堵する。するとタイミン
グを計ったようにウエイトレスが料理を持って健太郎達のテーブル
へやって来る。初めて食べるファミレスでの食事に千紗の笑顔はよ
り増し、健太郎の満足感も増していくのだった。

買い物等諸々終えた後の夜、健太郎は電話の前に立っていた。健
太郎の家に留まりたいと願った千紗を安心させるべく健太郎の両親
に電話を掛けるためである。恐らく千紗滞在の許可は下りるだろう
と思っただけでもこんな事例など過去になかったので、拒否される
可能性だって十分考えられる。

そんな緊張感にしばらく躊躇していると傍らに立っている千紗が
目に入る。千紗を再びホームレスにするわけにはいかない。使命感
に燃えた健太郎は意を決して電話をかける。

数回のコールの後、誰かが出た音が聞こえてくる。健太郎はその
瞬間唾を飲み込んだ。緊張の一瞬である。

「はい。浅井ですが」

電話に出たのは父親だった。健太郎に緊張が走る。

「親父か？ 俺、健太郎だけど」

「おお、お前から電話がかかってくるなんて珍しいな。どうした、
何かあったか？」

「ああ、実はちょっとお願いしたいことがあって」

「うん？ 言ってみろ。何をお願いしたいんだ？」

「昨日な、バイトの帰り道にホームレスに会ってな……」

「狩っちゃったのか!？」

「狩ってねーよ！ つーか自分の息子をどういう目で見てんだよ!」

「お願いしたいのは罪の揉み消しか？ 父さんは単なるサラリーマ
ンだから無理だぞ」

「人の話を聞けよ！ そのホームレスっていうのが同い年の女の子で放っておけなかったから家に連れてきたんだよ」

「人攫いも揉み消せないぞ」

「それでその子を家に住まわせたんだけどいいかな？」

「お前こそ人の話を聞け」

「くだらないボケにいちいち突っ込んでられるか。国際電話だぞ」

「それもそうだな。それじゃ早速判決を下すか」

「早っ！ 本当に考えたのかよ」

健太郎はいちいち話の腰を折る父親に少し苛立ちこしたものの、この感じならば大丈夫だろうと半ば予感していた。そして何より困っている人を助けたのだからそれに難癖をつけるような人ではないことも知っている。自分がこの人ならば盗みを働いたり暴行を加えて強盗をするようなことはないと判断して家に招き入れたのならそれを信じてくれるだろう。

だからこそこれから父親が下すであろう判断も余裕で待つことが出来た。そしてその父親の判断は健太郎の期待どおりだった。

「まず困っている人、まして女の子を危険な一人の状況から救い出したことはいいことだと思う。それにその子なら何も心配はないとお前が判断して家へ連れてきたなら間違いないだろう」

「ああ、むしろ純真すぎるぐらいだ」

「それなら家の通帳を持ってかれるとかの心配はないだろうな」

「まずそれはないな」

健太郎は話がいい具合に進んでいることに安堵していた。いくら許可が下りるだろうと予測していても実際に話してみないと何が起るかわからない。

健太郎は上手いきそうだと隣の千紗に笑顔を見せる。それを見た千紗も微笑み、今にも飛び上がらんばかりの喜びが湧き上がってきた。

「安心そうだということはわかった。……だが結論から言うと許可は出来ん！」

「……はっ？」

健太郎の笑みが凍りついた。それを見て千紗も不審そうに動きを止める。

今受話器から聞こえてきた父親の言葉がまるで知らない外国語であるかのように健太郎には思えた。全く今までの話の流れからは想像できない結論だった。居候娘の安全性を確認出来たのではなかったのだろうかと健太郎は頭の中で問いかける。

「聞いているのか？ 許可は出来ん！」

再度通告してくる父親の声でようやく健太郎は我に返った。信じられない父親の言葉にすぐさま健太郎は突っ掛かる。

「何だよ！ 何も心配いらぬ子だって言っただろ？」

「それでも許可出来んものは出来ん！」

「理由を言えよ。それだけじゃ引き下がれるわけないだろ」

健太郎は必死に食い下がる。理由次第ではすぐさま電話を切って自由に行動するつもりだった。しかし電話口から聞こえてきた父親の理由は再び健太郎を凍りつかせるものだった。

「若い女の子と二人きりで一緒に住むだと？ そんな羨ましいこと許可出来るか！」

「……。はあ？」

健太郎は絶句してしまう。この父親は何を言い出すのかと呆れきってしまった。

「こっちなんか母さんと二人きりだぞ。俺だって若い女の子と二人きりで……。はっ!？」

突然の父親の異変に健太郎は不審そうに顔を歪ませる。意味の分からない理由で許可が下りなかったことが不満だが健太郎は父親の異変を気遣う。

「どうしたんだよ親父、何か……」

「か、母さん。今のは所謂言葉の綾ってやつで……」

うろたえる父親の声が小さく聞こえてくる。どうやら母親に今の失言を聞かれてしまったらしい。

「ついうっかりな。若いってだけで最近反応するようになってしまつてな。いや、年を取るっていうのは本当に……。ぐはあっ！」

電話口から突然父親の悶絶の声と何かを殴打する音が聞こえてきて健太郎は思わず身を竦ませてしまう。

そして暫くの沈黙の後、今度は女の人の声が受話器から聞こえてきた。

「健太郎？　ごめんね、あの人が何か変なことを言ってたみたいで。それで女の子を助けたんだって？　やるじゃない」

父親を叩きのめし、母親が電話を代わったのであろう。健太郎は脳裏に母親の姿を映す。ふわふわにウェーブがかかっており茶色がかった綺麗な髪に、十分に熟れたスタイルのよい肢体、そしておまけにこちらも大人の女といった感じを滲ませている顔つき。一体父親は何が不満なのかと健太郎が思うほどである。やはり若いというキーワードが父親の判断力を奪ってしまったのだろうか。

「健太郎？　聞いているの？」

「うん？　ああ、聞いているよ」

想像の世界から帰ってきた健太郎は母親の話に集中しなおす。

「それであの人は訳分らないこと言ってたけど私はいいと思うわよ。あなたのしたいようにすれば」

「ほ、本当か母さん！？」

「ええ、あなたも分別がつかない年じゃもうないしね」

「ありがとう母さん……」

「でも女の子一人守ろうとするんだからきつちりしないと駄目よ」

「ああ、わかってるさ」

「それならいいわ。それじゃ電話代ばかりにならないからもう切るわよ」

「わかった。本当にありがとう母さん」

「それでもお金はちゃんと計画的に使いなさいよ。一人で大丈夫って言ってる日本に残ったからにはしっかりしないとね」

「ああ、わかってるよ」

「それじゃまた何かあったら連絡しなさいよ。じゃあね」

そう言って母親は電話を切った。もう四十代だというのに未だ美人である上に話の分かる優しい人。母親でなかったら惚れていたかもしれないと健太郎が思うほどだった。

それだけに千紗を連れてきた時に着替えとして母親の下着を失敬したことが健太郎は余計に恥ずかしかった。

健太郎は僅かに赤く火照った顔を千紗に見られていないだろうか様子を見る。どうやら千紗はそんな健太郎の表情の変化よりも自分の今後がどうなるのかということの方がよっぽど大事と健太郎からの報告を待っている。

コホンと一つ咳払いをして健太郎は報告を始める雰囲気を作り出す。それは自らの表情を誤魔化す意味も兼ねていた。

そんな小さな儀式で少し落ち着きを取り戻した健太郎は千紗の目を見つめて口を開く。

「あー、結論から言うくと千紗がここに住むことは許可が下りました」
「ホントですか!？」

千紗は眼球が転がり出るのではないかと思うほど目を丸くして驚く。途中から話の雲行きが怪しくなっていたことを感じ取っていた千紗は不安で仕方なかったのであろう。驚いた後は大きく息を吐き、体を弛緩させる。緊張が解れた一瞬だった。

「よかったですう……。こんな温かさに触れたらもうホームレスなんて無理ですよ」

「そうだよなあ。俺だったらそもそもホームレス出来てないな。絶対泣いて家に帰ってる」

健太郎はしみじみとそう思う。余程芯が強い楽天家でない限りホームレスをするなんて無理だろう。千紗が前者なのか後者なのかの判断はつきかねるが。

「家には帰れないですよ。結構なお金を貰って都会に出て来たのにそれを騙し取られて泣いて帰ってきましたなんて……」

「まあ御両親からしたら女の子一人でホームレスするぐらいなら泣

いて帰って来てほしいと思うがな」

そうは言っても一人暮らしの自由に飽き始めて少々寂しさ、物足りなさを感じ始めていた健太郎としては残ってくれて嬉しく思っていた。

「ま、とにかくこれで千紗は正真正銘この家の住人だな」

「はい。わがまま言って迷惑掛けてしまいましたけど、これからもよろしく願います」

こうして父親はどうか知らないが、一応親から許可を得た二人はこれからの新しい生活に向けて新たに挨拶を交わすのだった。

第五章 模様替え

第五章 模様替え

両親から千紗滞在の許可を得た翌日の朝、健太郎はいつもどおりに目を覚ました。昨日、綺麗に掃除した物置部屋で千紗が寝始めたため、健太郎の部屋はそれまでの光景を取り戻していた。

今日は土曜日、学校もなくバイトも入っていない。とりあえず何かに拘束されることはないので千紗の手伝いをしようということになっていた。

十分な空間と布団は確保されたとはいえ、生活をする上で物足りないのは否めない。昨日買って来たのは衣服、生活用品といった類の物のため今度はどちらかというと装飾や娯楽といった面をフォロ―したい。せっかくここに残ることになったのだから実家の方では経験できないことをさせてやりたいと健太郎は思っていた。それは千紗の願いを叶えてあげたいと千紗を送り出した両親のためにもなろう。

「いつまで千紗がいることになるかわからないけど楽しかったと思えるようにしたいな」

健太郎はそう呟くと体を起こし、着替えを始める。まずは朝食などのやる事を済まさなければならぬ。健太郎は着替えて部屋を出て階段を降りて行く。そしてキッチンへと入って行き、朝食の準備を始める。とは言ってもお湯を沸かしてパンを焼くだけだが。

そんな風に朝食の準備をしているとキッチンに千紗が入ってくる。

「おはようございます」

どうやらすっきり目覚めてきたようで眠そうな気配はない。挨拶を終えると千紗は席に座り、朝食を待つ。

だがそれでも何か出来ることはないかと辺りをきょろきょろ見回している。

「あの、何か手伝いましょうか？」

「ああ……。とは言ってももう準備は済んでるんだけどな」

「そうですか」

千紗は見るからに落ち込んでいた。高校時代は家の手伝いを毎日のようにやっていたようだから何もすることなく待っているのは居心地が悪いのだろう。

それを悟った健太郎は何かないかと考えるが、今日は洗濯物もそんなないし食事の準備もはや済んでいる。それでも手持ち無沙汰な千紗を見ていると何かやらせてやらないといけない気分になってくる。

「あっ、そうだ。千紗、新聞受けから新聞を取ってきてくれないか？」

「は、はいっ！ わかりました。行ってきます！」

健太郎が苦し紛れに思いついた仕事を与えると千紗は大袈裟なほど喜び勇みながら玄関に走っていく。よくよく考えると新聞を取ってくるなどものの数十秒で終わるのだからまた先ほどのように手持ち無沙汰になってしまいうだろう。

それを考えた健太郎はお湯を沸かしているやかんの火を強火にし、早く沸くようにする。トースターはどうしても無理だからこちらは焼けるのをただ待つしかない。

そうしていると玄関の方から走る音が聞こえてくる。音は一気にキッチンに迫り、千紗が勢いよくキッチンへ飛び込んできた。

「新聞取って来ました！」

「は、早いな……」

数十秒どころか十数秒で戻ってきた千紗は少し息が荒い。何もそこまでしなくても健太郎は思ったがそれだけこの家での役目に飢えているのだろう。新聞を取ってきた千紗はテーブルの上に新聞を置き、健太郎を見つめる。その目は何も語らずとも次は何をしたらいいかということを雄弁に語っていた。

いくら役目を欲しがってももうすぐ朝食ということで何も無い。

パンもいい具合に焼けてきているし、お湯もあと少しで沸騰である。出来ればもう大人しく椅子に座ってしてくれる方がかえってありがたいぐらいである。

だがそうは言ってもやる気に満ちた千紗の様子を見ると無碍に断るのも憚られる。健太郎はちよつとした板ばさみ状態である。

「おっ、お湯が沸きそうだな。千紗、沸騰したらマグカップにお湯を注いでくれないか？　そしてその後は茶葉のパックを入れといてくれ」

仕方なく健太郎は役目を千紗に与える。沸騰するまではあと少しだが、それまでは実質暇である。いてもいなくても大差ない仕事だった。

「はいっ！　承知しました！」

それでも千紗はやる気に満ち溢れた返事をしてコンロへと向かう。使命感に燃えている千紗は全く必要のない火の番をしている。この様子では沸騰するまで見守るつもりなのだろう。健太郎としてはこれで千紗が少しは落ち着いてくれるので一息つける状態になった。

使命感とやる気に燃えてくれるのはいいが、あまりに度が過ぎるとかえって扱いづらい。特に千紗は洗濯機もまだ扱えそうにない上に家の中も把握しきれていないだろう。やる気が空回りしやすい状態にあると言える。薄情ではあるが千紗を閑職に追いやった健太郎の判断は正解だっただろう。

千紗が火の番をしている間に健太郎は皿やバターをテーブルに出し、パンの焼け具合を見る。

「……もういいだろう」

ちょうどいい具合と判断した健太郎はパンを取り出し、皿に載せる。そうしている間にお湯も沸騰したようで千紗はマグカップにお湯を注ぎ、注ぎ終わったら今度はやかんに茶葉のパックを入れている。これでやることは済ました。

「千紗、もうパンが焼けたぞ。食べよう」

「あっ、はい。食べましょうか」

熱々のコーヒーを持って千紗はコンロから離れ、テーブルまでやって来る。そしてコーヒーを置いて席に座ると相変わらずの丁寧な挨拶が始まる。

「いただきます」

「いただきます」

千紗と健太郎の二人が揃って手を合わせて挨拶。千紗が来てから健太郎は食事前に関してはすっかり行儀がよくなった。もともと一人きりでいただきますと言うのは何だか虚しい感じがしたためでもあったが。

千紗は食欲旺盛にトーストに囃り付き、まさしく一日のエネルギーを注入しているという様子である。健太郎の友達の子は朝は食べないという子やそもそも食が非常に少ないというのが多いため中々新鮮な光景である。

そうしてついつい健太郎は千紗の食べっぷりを観察してしまう。

「本当によく食べるなお前は」

「えっ!? いけませんでしたか?」

健太郎としてはむしろ褒めるつもりで言ったのだが、千紗はどうやら悪く捉えてしまったらしい。健太郎はしくじったと思い、説明を付け加えようとする。

「いや、そういう意味じゃなくてな……」

千紗だって年頃の女の子なのだからよく食べるなど言っては健太郎の友達の子のように気にしてしまうかもしれない。そう思っただけで健太郎は弁明をしようとしたのだが、どうやら千紗の解釈は違う所へ向かっていったようである。

「すいません! そうですよ。居候の分際でそんなにパクパク食べたら迷惑ですよ」

「はあ?」

千紗の言葉に健太郎は思わず呆けてしまう。彼が考えていた方向の斜め上に行く発言に戸惑いを通り越してもはや呆然といった様子である。

スタイル云々の方面ではなく遠慮や食費といった方面で健太郎の言葉を捉えたらしい千紗はトーストを食べるのをやめてひたすら謝っている。このまま放っておけばいつまでも謝り続けかねない様子の千紗だったが、幸いすぐに我に返った健太郎はそんな千紗を止めようと努める。

「おいっ、落ち着けて。誰もそんなこと言ってないから。むしろ俺は感心してるんだぞ」

「……感心ですか？」

「ああ、朝から栄養をちゃんと取るなんて偉いじゃないか」

「そうですか？」

「勿論だ」

ようやく落ち着き始めた千紗を見て健太郎は安堵のため息をつく。千紗はあまりに真面目すぎて少し言葉のニュアンスを誤解するだけでこの有様である。真面目なのはいいが、毎回これでは疲れると健太郎はこの点に関しては改善をお願いしたいところだった。

なんとか千紗を宥めて食事を再開した健太郎は雰囲気を変える意味合いも込めて千紗に今朝考えた予定を提案し始める。

「そういえば今日はどうする？ 何も予定がないならお前の部屋の模様替えをしないか？」

「模様替えてしたばかりじゃないですか」

「ありゃ掃除レベルだよ。そこから一步進んでお前の好きなように配置だとか色々決めるんだよ」

「えっ!？」

驚く千紗を見て健太郎はとりあえず空気は変わったと感じて作戦の成功を悟った。あとは模様替えの話をしていけばいいと思っていたが、ここからがなかなか大変だった。

「そ、そんな悪いですよ。部屋まで提供してもらってるのにそれを私のために変えるなんて」

基本的は押しに弱く人の言葉をよく受け入れる千紗だが、どこかに自分の判断基準があるのかそれともその日の気分によってなのか

わからないが、人の提案に非常に遠慮をする時がある。細かく考えると家に上がり込んだり継続して住まわせてもらう時はむしろ自分の方から懇願したりなど積極的であったのにベッドの使用権や今回の模様替えなどどちらかというと小さなことの方に遠慮をしがちな傾向があるようだ。既に迷惑を掛けているのにその上更なる迷惑を掛けるわけにはいかないということなのだろうか。となると今回の件では既に部屋まで提供されているのにそれを自分の都合で引っ掻き回すことが悪いと思うといったところであろう。

とにかくこうなると健太郎は辛抱強く千紗を説得していかねければならない。別にそうかと流してしまってもいいところだが、素直に流せるほど健太郎はドライではない。そもそもホームレスの千紗を家に上げた時点でおせっかい焼きなのだから、このぐらいのことは当然のように感じているようである。

「何にも悪くなんてない。むしろ物置だった部屋が生まれ変わるんだから願ったり叶ったりだ」

「でも……」

正論で首を縦に振らせようとするものの千紗の遠慮ぶりも頑固なものである。こう手ごたえがあると健太郎としては引く気がむしろなくなっていく。好意をなかなか受け入れようとしない千紗に苛立つどころかむしろ説得に夢中になっていく。

「それにやっぱり自分が整えた部屋の方が落ち着くぞ」

「だけど……」

「それにうちに住み着いたことに比べればなんてことないだろ。部屋の様様替えぐらい」

「それはそうですけど」

「なっ、そうしろって」

健太郎は畳み掛けるように説得の言葉を放つ。頑固な一面はあるが、基本的に押しには弱い千紗には有効な手段である。徐々に千紗を押し込んでいく健太郎はもはや勝ちを確信していた。

「それにお前の両親だって都会で楽しく過ごせるよう願ってお前を

送り出したんだろ？」

「そ、そうですね」

「だったらお前は出来る限り楽しむことが親孝行だと思わないか？」

「それは……」

「それに自分からわがままを言っているわけじゃない。むしろ俺の方から提案してるんだ。何も断る道理はないだろう？」

「……そうかもしれませんね」

両親というキーワードを持ち出された千紗は健太郎の意見に流れつつある。慎重深い千紗だが両親の優しさでもって都会に出てきたことを考えると田舎では出来なかったことをするのも孝行かもしれない。そんな風に考え始めていた。

「わかりました。それではお言葉に甘えて私の部屋として模様替えさせてもらいますね」

「ああ、存分にやってくれ」

健太郎はそう言うのと討論を打ち切り、トーストの最後の欠片を放り込んでコーヒーを飲み干す。討論をしている間にも双方とも食べることや飲むことを止めなかったためちようどきりよく食事も終了していた。千紗もコーヒーを飲み終わり、流し台へと持っていく。朝食が終わった以上次にやることは決まっている。

二人はそろってキッチンから退出して二階へと向かう。そして千紗の部屋へと入っていく。目の前にはテーブルと座布団、古びたタンスと本棚ぐらいしかない。あとは布団を敷くための空間が広がっているが、壁際にスペースが目立っている。こうして見ると物置部屋となっはいたものの、ろくに使える物はなくどちらかというと粗大ゴミ集積所として機能していたことが窺える。

健太郎は千紗の部屋の奥にある窓から下を見ると粗大ゴミが置かれた庭が目に入った。粗大ゴミ収集の手続きはしたものの、すぐに捨てるわけではないのでそれまでは雨ざらしの状態である。粗大ゴミが去った後は庭の掃除もしなくてはと思う健太郎だが、まずはこことばかりに振り返る。

はつきり言って殺風景なこの部屋をカスタマイズすることが今日の目標である。まずは方針を定めるべく健太郎は千紗にいくつか質問をしていこうと考えた。

「千紗、お前の実家ではどんな部屋で暮らしていた？」

「畳の部屋でしたね。兄弟同じ部屋で」

「兄弟って何人兄弟？」

初めて聞いた情報に健太郎は思わず反応してしまう。そして気が付けば部屋のカスタマイズとは無関係な質問をしていた。

「姉が一人と弟が一人ですね」

「へえ。そう言えば俺の部屋で寝ることも抵抗なかったもんな。そうか弟がいたのか」

「はい。同じ部屋で川の字になって寝てましたよ」

どうやら千紗は兄弟相部屋でこれまで過ごしてきたようである。そうなるかと恐らく自分の色や主張を押し出した部屋には出来なかったであろう。千紗の話を聞いた健太郎は旧物置部屋がフローリングの洋風間であるのでその点では体験したことがないであろう部屋になりうると感じていた。

「そうなるか一人部屋っていうのはなかったわけだな」

「こっちに出てきた時に借りたアパートは一人でしたけど」

「ああ、それがあったか。そこはどんな感じだった？」

「やっぱり畳の部屋でそれと台所、お風呂、トイレぐらいしかありませんでしたね」

徐々に千紗のこれまで住居事情を知っていった健太郎は特に考えなくても自分の部屋や友達の部屋を参考にすれば十分千紗にとって目新しい部屋に出来ると考えた。

方針が定まった健太郎は頭の中で予算を計算し始める。さすがにあれもこれもと買い漁れるような財力はない。そうなる必要最小限の物をまずピックアップし、揃えていくことが肝要である。

「フローリングで布団って寝辛いよな」

数年間物置として使っていたため誰かが使うことを考慮に入れて

いないこの部屋はベッドなどない。だが、寝やすさもあるがそれ以上に未体験であろうベッドでの睡眠ということを考えると健太郎としては是非とも設置を実現したい。

「だけど予算が……」

しかしかなり苦しい現実がそこにはあった。そんな物を買えば部屋に追加できる物が限られるどころか今後苦しい生活を余儀なくされる。苦悩する健太郎を見ていた千紗は横から口を出す。

「あの、私布団で十分なんですけど」

「でもフローリングに布団って体痛くなったりしないか？ 結構薄い布団だし」

「大丈夫ですよ。これまで路上で寝ていたんですから」

そう言う千紗は胸を張って自信満々にしている。威張ることではないが妙な説得力がそこにはあった。

なかなか健太郎はそうかと頷けなかったが、実際どうにもならないとも感じているので千紗の言うとおりにしなければならぬ。

それでも健太郎としてはどうかよりよい着地点を探したかった。「フローリングの上に何かマットでも敷くか。そうすればちよつとは変わるだろ」

「それはいいと思います。暖かいですし」

「そうだ。ベッドはお前さえよければたまに変わって使わせてもいいし」

「い、いえいえっ！ そんな悪いですよ。健太郎さんをベッドから追い出すみたいで」

健太郎は名案とばかりにベッドの貸し出しを思いついたのだが、千紗は例の如く遠慮の姿勢を顕わにする。それに対して健太郎は明らかに不愉快そうにしている。先ほどまでは説得に夢中になっていたが度が過ぎるとさすがに苛立ちも生まれてくる。

（ここらで一つ千紗のこの悪い癖をどうかしとかないとな……）

千紗のあまりの遠慮振りは逆に相手を不快にさせることすらありえる。それを憂慮した健太郎はここらでそれを少し抑えさせなければ

ばならないと感じていた。

部屋の模様替えとともに千紗の性格も模様替えをせねばと意気込んだ健太郎は心を鬼にして千紗に立ち向かう。

「千紗」

「は、はい……」

急に雰囲気が強くなった健太郎に怯えたのかやや大人しく返事をする千紗。先ほどのまでの楽しい模様替えの空気はどこにやら現在のこの場は一転重苦しく硬い空気へと変わり始めていた。

「お前はその遠慮がちな態度を謙譲の心としているかもしれないが、はつきり言ってそうではないことも多々あるぞ」

「えっ？」

「過度の遠慮はかえって相手の良心を踏みにじることになる」

「あっ……」

「そうなるとお前の態度は相手を傷つけることになるわけだ」

「……」

「確かに遠慮は大事なかもしれないけど場合と程度によるってことだな」

「……」

すっかり千紗は黙り込んでしまい、親に怒られた子供のようになってしまう。自分のとっていた行動が相手に敬意や尊重を示すどころか不快にさせることがあると知って衝撃を受けているようである。

健太郎が言う遠慮もどちらかというと小さなところでの遠慮のため余計に相手に不快に気持ちを与えがちである。大きな好意は聞き入れて小さな好意を遠慮しがちというのは完全に逆転行為である。そこは改めておかないと今後千紗が困ることになると健太郎は判断した。

心苦しいがここは鬼にならないといけないと健太郎は意志を強く持って千紗を諭す。

「まあ、これからは少しそこら辺を考えてみてくれ。あつ、だから

って遠慮を知らない風になれって言うてるわけじゃないからな」

「……はい。考えてみます」

健太郎の言葉に頷いた千紗は明らかに意気消沈といった様子である。健太郎は少し言い過ぎたかと思ったが、遠慮のし過ぎで関係を悪くさせては遠慮の意味がなくなってしまう。それは千紗に災厄をもたらす可能性があるかと判断した上での行動なので間違いとは思わないが、それでももっと上手い言い方があったかもしれないと健太郎はその点では後悔を若干感じていた。

この一連のやり取りですっかりこの場の空気は悪くなってしまったように千紗は落ち込んだように見え、健太郎もどこか居心地が悪く感じていた。それでも自分が主導して模様替えをしようと言った手前、ここから立ち去るわけにもいかない。そうなると健太郎の行動は一つしかなかった。

「さっ、話はここまでにして模様替えを始めるか！」

無理に明るく振舞い始めた健太郎。どうにか空気を変えようと必死である。腕を軽く回してやる気をアピールしている。そして大股にずんずんと部屋の奥へ向かう。

「とにかくこの壁際を上手く使いたいよな。今のところタンスと本棚しかないからな。何かまだ置けるぞ」

そう言って健太郎は手を広げる。スペースはまだ余裕があるとのアピールであろう。

健太郎が言うとおりまだ部屋にはスペースが十分残されている。部屋には入って左手にタンスがその隣にクローゼットがある。部屋の右壁にはスライド扉の収納があり、そこが健太郎が押入れと呼ぶ場所だった。正面の壁には本棚があり、そして部屋の中央に小さなテーブルと座布団という光景である。所々にスペースがあり、まだ財力があればテレビやパソコンなどが置ける余裕がある。

「でも窓際には背丈のある物は置けないからな。色々悩みどころがあるなあ」

さっきから一人で喋っている健太郎はそろそろ限界だった。重苦

しい雰囲気はちつとも解消されておらず一人で空回りしている有様である。ぐるぐる部屋を練り歩いて模様替えの考えを巡らせ、そして時には提案もするが完全に独り言状態である。

今のところの千紗の模様替えは完全に失敗していると言っている。遠慮を失くさせ、壁を薄くしようとした健太郎の目論見は見事に逆効果となっている。こうなると部屋の模様替えもまるで意味をなさない。かえって居心地のいい空間を提供して部屋から出ない環境を作り出してしまいかもしれない。

心地よく住めるようにしてこの家の一員になってもらおうと思った考えが逆に避難所になりかねない事態に健太郎は焦り始める。家の中で対立が起こるぐらいならまだ一人の方がよかった。それどころか今までの遠慮の強い千紗でもむしろそっちの方がよかったかもしれない。

千紗の遠慮など小さなものだっじゃないか。この家に住みたいと自分の願いを言ってくれた。ちゃんと自分の大事なところは口にしてくれていたのだからそれでよかったのではないだろうか。徐々に健太郎はそう思い始めていた。

「なあ、千紗……」

弱気の虫が現れ始めた健太郎は千紗に弱弱しく恐る恐る声をかける。さっきまでの説得の姿からは考えられないほど優しい声である。

「やっぱり……」

健太郎が先ほどの言葉を撤回しようとした刹那、千紗は伏せていた顔を上げて健太郎を見据える。突然の機敏な動きに驚いた健太郎は続けようとした言葉を思わず飲み込んでしまう。

「健太郎さんの言うとおりです。私、遠慮のし過ぎだったですよ。相手の好意を踏みにじっていました」

千紗は何かを決意した表情で言葉を紡いでゆく。

「私も受け入れてもらった以上、この家の一員として暮らしていきます」

「お、おう。それなら俺も何も言うことはないな」

「はい。それではさっそく私好みの部屋に作り変えさせてもらいます」

「よし。それじゃ始めるか」

結構単純に考えを改めた千紗に少々拍子抜けがした健太郎だったが、この様子なら今後も変な遠慮などしないだろうと安心することができた。一つ屋根の下で暮らすというのに他人行儀ではやっぱりお互いに気まずい。すっきり窓を開いていたものだ。

千紗の心の模様替えをまず逆転で、とは言っても主に千紗の思い切りがよかったただだが成功させ、次はいよいよ部屋の模様替えへと移っていく。もはや遠慮の気配を引っ込ませた千紗は先ほどまでのような健太郎のみが張り切る事態には決してさせなかった。自ら部屋を見渡して考えを練る。

「やっぱり私としては何か都会的な物を部屋に置きたいですね」

「何だ？ 都会的な物って」

健太郎は曖昧な千紗の言葉に疑問を持った。一体何が都会的で何が都会的でないのかがなかなか判断しづらい。その辺を千紗の感覚で判断してもらおうと健太郎は考えを頭の中で止めて、千紗の次の言葉を待った。

「例えば、そうですね、CDラジカセ……で合ってますっけ？」

「あん？」

「音楽を聴く機械ですよ」

「あ、ああ。合ってるけど、今はあまり使わないかもなあ。家があれば使うかもってぐらいでわざわざ買ったりはしないと思う」

「ええっ!？」

千紗は健太郎の言葉を聞いて大袈裟に仰け反る。ようやくいつもの明るい千紗が帰ってきたなと健太郎は思ったが、それと同時に千紗の驚きに強い関心を示していた。早速自分の望みを言ってくれそうで使命感に火が点いた感じである。

「何だ音楽が聴きたいのか？」

「はい。家にはテレビとラジオぐらいしかなかったですから」

「そうだなあ。親父の部屋にCDラジカセあると思ったけどどうだろう？」

「健太郎さんは何で音楽を聴くんですか？」

「俺はMDコンポかパソコンかな。外ではケータイで聴くけど」

「ケータイ！ 知ってますよ。携帯電話のことですよね？」

千紗はケータイという単語に目聡く、いや耳聡く反応した。今や若者のみならず仕事でも欠かすことが出来ない壮年世代でも持っている携帯電話をまるで未来の機器でも想像しているかのような反応である。

「ああ、そうだな。電話代かかるから専らメール機器になってるがな」

そう言いながら健太郎はポケットから携帯電話を取り出す。登場した折り畳み式の携帯電話を見るとその瞬間、千紗の目が輝いた。

「ああっ！ ケータイです！ 本物ですよ！？」

まるで珍獣でも見るかのように大騒ぎをする千紗。そして思わず千紗の手は携帯電話に伸びていく。

「お、おい。何奪い取ろうとしてんだよ」

「はっ！？ す、すみません」

健太郎の声で我に返った千紗はぺこぺこ頭を下げて謝る。しかし頭を下げながらも視線はしっかり携帯電話に釘付けである。その動作に微笑ましく感じた健太郎は苦笑いしながら携帯電話を千紗に差し出す。

「ほら、見ていいぞ。だけど少しだけな。模様替えもやらなきゃいかんのだから」

「い、いいんですか？ もし壊しちゃったら……」

健太郎が差し出すと途端に引く姿勢を見せだす千紗。健太郎はまた遠慮の態度が出てきたかと思ったが、どうやら違うようである。どちらかというと千紗の様子は遠慮しているというよりも未知の機械を前に怖気づいている感じである。

「大丈夫だって。俺が教えてやるから」

そう言うのと健太郎は携帯電話を操作し、アドレス帳を開く。目まぐるしくディスプレイの画面が変わっていくのを見て千紗は感嘆の声を上げている。

「ほら、これが俺の家の電話番号な。あとはここを押せば電話が繋がるから使ってみろ」

「えっ、えっ？ 電話するんですか？」

いきなり携帯電話を使ってみろと言われた千紗は狼狽を隠すどころか前面に押し出して不安そうな顔を健太郎に向ける。

「大丈夫だって。相手は俺だし」

自分の部屋に向かいながら健太郎は千紗に安心するように諭す。どうやら自室から子機を取ってくるつもりらしい。

「でもでも」

「いいから押せ」

「ううううう……」

「何事も経験。親孝行！」

「うううう、卑怯ですよ。そう言われたら引けません」

「そんなこと言っちゃって本当は使ってみたくせに」

健太郎はお見通しだと言わんばかりにニヤニヤしている。内心、使ってみたい気持ちは非常に大きいが踏ん切りがつかないといった感じであろうと健太郎は読んでいた。一步踏み出せば恐らく携帯電話の虜になっているだろうとも健太郎は読んでいる。

そうなった場合親父に相談してみようと健太郎が考えているとうとう千紗が携帯電話の発信ボタンに指を伸ばした。じれったくなるほど時間をかけて千紗は発信ボタンを押して携帯電話を耳に当てる。別にそんなにしなくてもと思うほど耳に押し付けているため顔がやや変形してしまっている。余分なボタンも押しかねないので健太郎は緊張で固まっている千紗の手をやや顔から離してやる。

そんな風に千紗の面倒を見ていると健太郎の手に握られている子機から音が鳴り始める。健太郎はすかさず通話ボタンを押して耳に子機を当てる。

「おお、ちゃんと掛けれたじゃないか」

「ああっ、すごいです。ちゃんと声が聞こえますよ！」

千紗の喜ぶ様子を見て健太郎は今日何度目だろうかという苦笑いを浮かべる。健太郎はほぼ千紗の真横にいるのだから声が聞こえるのは当然である。それにしても隣同士にいる電話での会話。なんともシュールな光景である。

しかし千紗はもう夢中だった。ひたすらすごいあの聞こえるあの携帯電話の賛辞を繰り返している。健太郎はそれを聞きながら徐々に千紗から距離をとっていく。そうは言ってもはしゃいで声が大きくなっている千紗の様子を考えると家の中のどこにいても聞こえてきそうである。

「これが携帯電話ですか！ まさしくハイテク。素晴らしいです！」

こうして模様替えは進まず、午前中は千紗の携帯電話いじりで終わっていくのだった。

結局午前中を遊びただけで終わってしまった二人は真面目にやろうと午後からは模様替えに没頭していた。父親から拝借してきたCDラジカセを背のやや小さい本棚の上に載せ、カーテンをつけ、テーブルの下に絨毯を敷くなどして部屋を飾っていった。

しかし急に模様替えをしたこともあって思ったよりも小規模な出来映えになっていた。これ以上のことをしようとすると思い物をしなくてはいけないうが、思いつきで買い物をすると思わぬ失敗を招くだろうと結局この程度でよしとしようという結論になっていた。これからはちよくちよく本を買うなりCDを買うなりして細かく整えてもらおうということである。

午後から始めて中途半端な午後五時頃に模様替えが終了してしまった。この時間ではなかなか今から出かけようという気分にはなれない。午後一番にカーテンを洗濯したことが少ない作業量のわりに時間がかかった要因だった。結局カーテンは午後からでは干しが足りず、生乾きで設置した。終了時間だけでなく作業自体も中途半端

に終わってしまったが、やむを得ない。

「つーか干してる間に出かければよかったんだ……」

もうすぐ夕飯を作る時間帯という頃になってようやくそのことに気がついた健太郎はキッチンのテーブルに突っ伏して後悔していた。カーテンを干して、部屋の模様替えを手早く済ました後、優雅に午後のティータイムなんぞを楽しんでいる暇があれば買い物に行けばよかったとつくづく感じていたのだ。別にカーテンは番などしていなくても誰も盗まないし、勝手に逃げることもない。

「でも無計画に買い物しても後悔したと思いますよ。これでいいんですよ」

千紗は暢気にそう健太郎を励ます。しかし健太郎は意気込んでいただけになかなか割り切ることが出来ない。どうも時間を無駄にしたようでならない。この辺りは性格の違いが大きく表れていた。

「まあ、でも楽しかったよな。特にケータイへの反応が」

「高校時代に持っているクラスメイトがいましたが、あんなに近くで見たのは初めてでした」

「見るどころか触って通話までしたしな」

二人は笑いながら今日一日を振り返る。不満も残る模様替えだったが、一緒に作業をしているとやはり楽しかったようである。それに千紗の遠慮癖を吐き出させて、それを改善させる方向へと向かわせたということを考えればやはり十分な結果であっただろう。居候という立場から一歩前進したようなそんな出来事であった。

「とりあえず内装は整えたから、あとは好きな本を買うなり何なりして自分好みの部屋にするんだな」

「私個人の部屋……。何か不思議な感覚です」

「そっか。そういえば兄弟相部屋だったんだもんな」

「でも最初の内は一人の部屋っていうのに戸惑うかもしれませんね」

「何言ってるんだ。一人暮らしをしてたんだろ？」

「アパートは壁が薄くてそれなりに音が常に漏れていましたからね……」

「後期は開けっぴろげな路上だもんなあ」

それでも我が家も別に防音性に富むというわけでもないのになにアパート時代と変わりはないだろうと健太郎は考えていた。それに別に自分の部屋を持ったからといって閉じ籠っていなければいけないわけでもない。寂しかったら健太郎の部屋に遊びに行くなりリビングに行くなりすればいい。健太郎が千紗に部屋を持たせようと思ったのは孤独を感じさせるためではなく証明を示したかったからなのだから。

「まあ、とにかく部屋を持った以上お前はこの家の一員だな」

「えっ？」

「ここがお前の第二の実家とかそういうことだ」

「あっ……」

健太郎の言葉を聞いた千紗は目を大きくして驚く。そんな千紗を見て健太郎は小さく微笑む。やや芝居がかった仕草だが、本人は真面目に話しているだけにそこに可笑しさは感じられない。

「これからよろしくな、千紗」

「……。はいっ！ 改めてよろしくお願いします」

こうして居候改め、浅井家の住人となった千紗は改めて元氣よく挨拶をするのだった。

第六章 初体験

第六章 初体験

土曜日の間に簡単な模様替えを済まし、日曜日にも買い物や家事等であっという間に過ぎ去った。そして本日は週初めの月曜日。健太郎は大学生なわけで、当然学校に行かなければならない。だが、健太郎の頭には懸念が残っていた。それは千紗をどうするのかということだった。

幸い先週は週末にバイトを入れてなかったこともあって千紗が一人で家に残されるということとはなかった。だが学校があるとなっては当然千紗は一人で留守番ということになる。

千紗も一人でホームレスをしながら生き抜いてきた立派な大人である。そこまで心配する必要もないかと健太郎は考えたが、やはり不安も付き纏う。なんと言っても極端に人が良い千紗のことだ、怪しい訪問セールスがもし訪ねて来ようものなら一発で騙されそうな気がしてならない。それ以外にも未だ住み始めて浅いこの家を一人で任されるのは生真面目な千紗にとっては不安材料であろう。双方にとって不安が満載である。

だからといってまさかまたサボるわけにはいかない。完全な八方塞である。

「どうしようかなあ……」

誰に呟くともなく健太郎は言葉を虚しく空気中に発する。こんな言葉を発してみたところで何も解決しないことは分かっているが、それでも呟かずにはいられない。それほど健太郎にとって深刻な問題だった。

そんな風に健太郎がキッチンで考え込んでいると寝惚け眼を擦りながら千紗がキッチンに入ってきた。

「おはようございます……」

半分まだ夢の世界に足を突っ込んでいるのか、ゆらゆらと揺れながら歩いている。不安な足取りで歩いていく千紗を見ると健太郎はますます千紗を一人にするのが不安に感じてきた。だいたい田舎から出てきて一人でやっていこうとした挙句にホームレスになった経緯を

考えるとやはり一人にしてはいけない人物であるとの判断に徐々に傾いていく。

健太郎はこうして結論を一人にしておけないというものに定め、今度はどうして千紗を側に置いておくかを考え始める。それを実現するには方法は一つしかない。大学に連れて行くということである。大学ともなると高校までとは違って比較的人間が多く、更に違う学科ともなると顔見知りすらいないうこともある。まだ大学に入ってから一ヶ月余りの健太郎は顔見知りも少ない。不審に思われることはないだろう。

そして健太郎は次に今日の授業を頭の中に思い浮かべる。今日は午前から英語、日本史学、そして午後から日本倫理思想史というスケジュールだ。日本史好きが高じて日本文化学科に進んだ健太郎としては英語などやりたくはないが、必修のため避けては通れない。そして何よりこの科目は出欠をしっかりと取るという点でも厄介だった。欠席をするわけにもいかない。だが、千紗が紛れ込むことも出来ない。他の授業は出欠を取らないので紛れ込んでも恐らく気付かれることはないだろう。まず目下の障害は英語だった。そしてこいつは朝からあるためタイムリミットも目前である。

「なんとかばれないように出来ないかな」

「何をですか？」

健太郎の独り言に千紗が加わってくる。どうやら眠気はようやく覚めたらしくそれなりにしっかりした口調である。

「何ってどうやってお前を学校に連れて行こうかと……」

「えっ!? 私、学校に行くんですか？」

驚いたと言わんばかりの顔で千紗が質問してくる。その反応を見

て健太郎は今更ながら千紗の考えを聞いてなかったと思いつた。勝手に一人で話を進めていたことに気付いた健太郎はすまんすまんと手で謝りながら自分が考えていたことを説明していく。

「悪い、お前に話すの忘れたわ。今日、俺は大学に行かなきゃならんわけだが、そうなる家にはお前一人になる」

「そうなりますね」

「だけど正直お前を一人にすると不安が一杯だ」

「ひどい言い草ですね」

「まあ、それに退屈だろうしな。まだお前の部屋にはCDもなければ本もないわけだから」

「そうなる私は大学に付いて行くことになりますよね」

「結論から言うとなくなるな」

説明をしても特に千紗には嫌がるような様子はない。これは簡単に了承は取れるかと思った健太郎だが、ここでも千紗の真面目さは健太郎の前に立ちはだかる。

「でも私は学生じゃないですよ？ 入れないですよ？」

「あゝ、それはだなあ……」

思わず健太郎も言葉に詰まってしまう。よくよく考えれば真面目な千紗が無断で大学に紛れ込むなどという行為をするとは思えない。千紗の遠慮しがちな態度は説きたものの、これに関しては完全に大学からすれば規則違反なわけだから正当性がない。なかなか筋道を立てて説くのは難儀そうである。そう思った矢先に健太郎の頭に名案が浮かんだ。

「あれだ、オーブンキャンパスみたいなものだと思えばいいんだ」

健太郎はこれはい理屈だろうと自分で自分を褒めた。確かに勝手に紛れ込むのはよくないが、大学の参考資料としてならばそれに正当性はあるだろうという考えだった。それでも結局大学に許可を取っていないわけだから根本的には何も変わってはいないのだが。

「千紗だって大学を見てみたいだろう？ これも一種の社会勉強だ

な」

とりあえずまず千紗を納得させてから、最初の授業である英語の対策を考えなければならぬ。だから健太郎としてはこんなところで時間を取られている場合ではないのだが、そもそも千紗を説得し得ないのでは英語の対策を考える意味もなくなる。

健太郎は一気に千紗を納得の方向へ転がらせようと畳み掛けていく。

「それに大学だって一人でも生徒を獲得したいんだから宣伝は出来るに越したことはないはずだ」

「そうなんですか？」

「そりゃそうだろう。学生が入ってこないと運営できないんだから」
「そうですよねえ。うーん……」

悩む千紗を見て健太郎は徐々に焦りを見せ始めた。そろそろ大学に行く準備をしないといけない。それまでの間に今度はどうやって千紗を英語の授業に潜り込ませるかを考えなければいけないとやることはまだたくさんあるのだ。

「それに何だかんだ言っただってお前だって大学を見てみたくないか？」

「えっ？ それは見たいですけど……」

「それなら行けばいいさ。見学だ見学」

「いいんでしょうか？」

大学を見てみたいかそうでないかと言われるとどうやら千紗も興味があるらしく、心は未だ揺れてはいるものの明らかに罪悪感よりも興味の方へと意識はシフトしている。ここが好機と見た健太郎は力押しに攻め立てる。

「教える側だってどうせやるんなら一人でも多い方がモチベーションも上がるってなもんだ。だから行こうぜ」

「そういうものでしょうか。それなら行ってみようかな」

「おお、行け行け。家でじっとしているよりもよほど意義があるぞ」

「はい。それじゃあお世話になります」

「よし決定！」

こうして話をまとめた健太郎は今度はどうやって英語の授業に千紗を潜り込ませるかを考えなければならぬ。だが、時間を見るともう危ない時間帯だった。移動しながら考えるしかない。そう悟った健太郎は千紗に支度をするよう指示する。

「とりあえずお前はまず着替えろ。すぐ出なきゃいけないからな」
「わかりました」

千紗は聞き分けよく返事をする。とすぐにキッチンを出て、部屋へと向かう。既に着替え終わり、支度は整っている健太郎は改めて対策を練ることにした。千紗の支度が終わり次第すぐに家を出なければならぬため余裕はさほどない。大学までは約二十分の距離。タイムリミットは三十分ほどといったところか。

まず健太郎は千紗を連れて教室に入った場合を考えてみる。英語の授業は学科ごとで受けるため、ほとんど顔見知りである。だから見知らぬ女の子を連れて入って行くものならすぐに注目の的だろう。それだけでも下策だが、さらに出欠を取っていくとまず教師にも発覚することは間違いない。これは現実的に採りえない策である。そうなる。今度はとりあえず英語の時間だけはどこかで大人しくしてもらっていて午後からは同伴で授業を受けるという形が浮かんでくる。

「これしかないように思えるけど……」

そう呟く健太郎だが、この案には不安も大きい。第一家に残しても不安が残る千紗を英語の間だけとはいえ一人にするのだから無理もない。構内で迷子になりかねないし、何か想像もつかないトラブルを巻き起こしそうな予感がする。健太郎はとりあえず中策としてこの案を保留にしておいた。

「だけど他に案なんてあるのか？」

八方塞といった様子で悩みこむ健太郎。やはり家に残らせる方が一番マシだったかもしれないと思っただが、何とか説き伏せた手前今更残れともやはり言い辛い。こうなると何とかよりよい方法を考

え付いて、切り抜けるほかない。健太郎は頭を抱え込んで必死に知恵を振り絞る。

「一か八か英語の授業をこっそり受けさせるか？ いや駄目だ、当てられた場合一発でばれる。……はっ!？」

徐々に焦りの表情を隠せなくなってきた健太郎は上から聞こえてきた音に敏感に反応した。どうやら扉を閉める音らしく、それは千紗の支度が終わったということだろう。予想外に早い支度にさらに健太郎は狼狽し始める。

「くそっ! あいつの準備は何でこうも早いんだ」

年頃の女なんだから化粧でもして時間をかけろと健太郎は毒づくが、千紗がそんなものを持っていないことはよくわかっている。

こうなるともう自棄だと健太郎は開き直って千紗を待ち受ける。

「こうなったら出たとこ勝負だ。とりあえず学校へ行くか!」

健太郎はそう吼えると鞆を持って玄関に向かい、千紗を待つ。階段を降りてきた千紗はTシャツの上にシャツを羽織り、下はジーンズというラフな格好である。何とか野生的で健太郎にとってはらしく思える格好なのだが、長い黒髪の似合う美人といった容姿のためアンバランスさも感じさせる。

何にせよこれは間違はなく目立つ、特に男子に凝視されるだろうと感じた健太郎はもう覚悟を決めた。もうこれは絶対に一人にしておけない。放っておけば大学内でナンパの嵐に遭うだろう。純朴な田舎少女では飲み込まれてしまうに違いないと簡単に予想できるだけに決断は早かった。

「英語は休もう……」

出席を重視される授業のため痛手だが止むを得ない。千紗がこっちの生活に慣れるのにあと一週間もあれば大丈夫だろう。だから今回一回きりだと自分に言い聞かせて休むことへの罪悪感を和らげる。そうは言っても先週はそもそも学校自体を休んだのだから何を今更という感じではあるが、出欠を取られる授業を休むことへの罪悪感

は何故か数割増に感じられてしまう。欠席が明らかにわかってしまうからだろうか。

とにかく午前中は千紗に構内でも案内して回るかと考えながら千紗と共に家を出る。しっかりと施錠をして、歩き始めると千紗はやはり明らかに楽しそうにしている。男である健太郎よりもむしろ早い足取りで歩いている。大学の学生でないなど真面目なことを言うてはいても

やはりそこは行けるものなら行ってみたかったのであろう。

「健太郎さん！ 大学ってどんな所ですか？」

ハイテンションに質問を投げかけてくる千紗に苦笑しながら健太郎は答えていく。

「そうだなあ、とにかく広いつてのがまず目に飛び込んでくるかな。高校なんて話にならないからな」

「そ、そんなに広いんですか？」

「高校とはそもそも生徒数が違うからな」

いちいち反応が大きい千紗に何かを教えていくのは非常に楽しい。健太郎はそう思い始めていた。自分の話に興味を持って食いついてくれるというのはこんなにも嬉しいものかと健太郎はある種人生の喜びを発見していた。これまでも友達は数多くいたが、ここまで話に興味を

示してくれる人はそういなかった。妙なやり甲斐に燃えた健太郎は千紗の興味は逐一答えてやろうと静かに気合を入れた。

「大学には電車で行くからな。お前は電車には乗ったことあるのか？」

この質問には千紗は頬を膨らませて不満を顔一杯に表す。どうやら田舎者と侮りすぎたようだ。そもそも田舎からここまで出てきたのだからその時点で電車に乗っているだろう。完全に気合が空回りの結果だった。何でも教えてやろうと意気込み過ぎである。

「で、電車ぐらい乗ったことありますよっ！ 馬鹿にし過ぎです！」
「す、すまん。今のは俺が完全に悪かった」

「バスだつて乗ったことありますからね！」

「ああ、わかった。わかったからとりあえず落ち着いてくれ」

「全然話を聞く気ありませんね？ 田舎者だつて何でもかんでも知らないわけじゃないんですよ」

「だから落ち着けて。周りが見てる」

「えっ？」

それまで大声で捲くし立てていた千紗は健太郎に言われて周りを見渡す。すると何の騒ぎかと数多の視線がこちらに突き刺さっていた。結構な人数が何と言っていたかわかっているようで笑いを堪える者、堪えきれずに友達と一緒に笑っている者など様々な反応が千紗の視界に入った。

それらの反応を理解した瞬間千紗の顔は一瞬で真っ赤に染まった。「き、きやあああああああつ！」

真っ赤になった顔を両手で隠しながら千紗は叫んでその場から離脱する。突然の奇行に再び周囲の視線を釘付けにするが、あつという間にその場から消え失せた千紗の代わりに今度は周囲の視線が取り残された健太郎に突き刺さる。

「うっ、ま、待てよ千紗！」

その視線に居た堪れなくなった健太郎は千紗を追って駆け出す。気合を入れた結果、全てが裏目に出してしまった健太郎は一体自分はどうすればいいのかわらなくなっていた。

頭の中で納得のいかない感情が渦巻きながらもとりあえずまずは千紗を捕まえないければいけないと健太郎は千紗を追いつける。

走って火照ったためかそれともまだ先ほどの羞恥が引かないのか顔を赤くしたまま両者とも鬼ごっこを続ける。田舎育ちのためかやけにタフな千紗に健太郎はなかなか追いつくことが出来ない。健太郎の顔は赤いどころかもはや汗まで噴き出し始めている。

「ま、待て千紗……。大学に行くんじゃないのか……。はあはあ……」

息が切れ、体力も尽き掛けてきた健太郎はとぎれとぎれに声をかける。女の子に競り負けたことが微妙に悔しいようだが、そんなことを頭わにすればまた難しいことになりそうだから健太郎は素直に待つよう呼びかける。

そのか細い声を聞いた千紗は走るのを止め、健太郎の方へ振り向く。こちらはまだ余裕綽々といった様子である。顔がわずかに赤いのはまだ高まりきった羞恥心が冷めてこないためであろう。だが幾分か冷静になったようで疲れきってへたり込む健太郎に驚いて駆け寄っていく。

「健太郎さん！ ど、どうしたんですか！？ そんなに弱りきって……」

健太郎の側に駆け寄り、背中を擦り始める千紗は健太郎がこんなに弱りきっているのがどうしてなのか全くわからないといった様子である。ただただ突然の健太郎の異変に驚いて労わるだけである。

健太郎としてはお前のせいだろうと言ってやりたいところだったが、これ以上予想外の展開を作りたくないということと何より今は息も乱れて疲弊しきっているため喋りたくないということから黙って千紗にされるがままになっていた。

もう英語の授業を休むことに決めた以上、時間はそこまで問題ない。ただ広い構内を回るのが乳酸が溜まった足では億劫になりそうだと健太郎は思ったが、これ以上無様な姿を見せたくないという感情もまたあった。複雑な心境である。

「しかしこれだけ走っただけでこんなになるなんて……。体力落ちたのかなあ」

それは健太郎の素直な心境だった。少なくとも受験シーズンで体育の授業が遊びの時間に変わり果てる以前はこれぐらい走ったくらいでは確かに息が切れるぐらいはしたが、へたり込むようなことはなかったはずである。ここ三、四ヶ月で急激に体力が落ちたことを実感した健太郎は千紗を賞賛の眼で見上げる。

「それにしてもお前はすごいな。俺なんかこんな有様なのにビクと

もしてない」

「やっとな舎育ちのいい面を見せることが出来ましたね」

「それ田舎育ち関係あるのか？」

「農作業を手伝ったりしてましたから体力には自信があるんです」
そう言うとな紗は筋肉自慢をしたがる男のように腕を曲げて力強さをアピールする。一見長い黒髪の似合うお淑やかな女の子に見えるが、その腕は細いものの引き締まっていてよく鍛え上げられていた。ラフな格好にボディビルダーのようなポーズは纏う雰囲気とのアンバランスさが凄まじかった。そんな様子を見てみると余りのギヤップにどうしても笑いが込み上げてきてしまう。そしてその内、堪えきれずに健太郎は思わず吹き出してしまう。

「ぶっ、あはははっ！ やめてくれ、笑える。普通女の子が取るポーズじゃないよ、それ」

「な、何笑ってるんですか！ 失礼ですよ！」

「だって明らかに筋肉自慢のポーズだぞ、それ」

「筋肉自慢なんかしてません！」

「プロポーションよりも筋肉の方が自信ありますってな感じ？ あはははっ」

「……」

「おっとこんな馬鹿言ってる場合じゃないな。早くしないと構内回る時間がなくなっちまう。そんじゃそろそろ行くか。……って千紗？」

「……健太郎さんは……」

「ど、どうしたんですか？ 千紗さん？」

千紗の異変に今更ながら気付いた健太郎は千紗の様子を恐る恐る窺う。つい今まで千紗をからかって遊んでいたというのに原因がわからないと言わんばかりに千紗の様子を観察している。その態度がまた千紗の怒りに火を注いだ。

「健太郎さんは……最低ですっ！！」

「えっ？ ぐはああっ！」

引き締まった腕から繰り出された右ストレートで健太郎は吹き飛ばされてしまう。あまりの破壊力に健太郎はきりもみ回転しながら地面すれすれを暫し飛んでいた。しかし一、二秒後今度は地面を滑走する。その衝撃に健太郎は再び地面に伏すことになった。先ほどは疲労、今度は衝撃によるダウンである。

「お、俺ってやつはさっきのからかいで懲りたはずなのに……。何にも学習してなかったか……。ぐふっ」

千紗をからかうとろくなことになるかと先ほどの全力疾走で悟ったばかりなのに早速またやらかした健太郎は悶絶の果てに気を失った。どうやら反省を超えるほど千紗をからかうことは楽しいのであろう。これはもはや本能だった。

自分が取った行動によりやく気付いた千紗は焦りながら健太郎へと近付く。こうして先ほどの繰り返しのようにな千紗は健太郎を助け起こして背中を擦る。この二人が学校に着くのはまだ時間がかかりそうであった。

「やっと着いた……」

健太郎は疲れきった様子でそう呟く。千紗に介抱してもらい数分後蘇生した健太郎だったが、頬に見事にグーパンチの痕が残っていたため電車内ではちよつとした晒し者だった。そして連れが女であるというのが尚更精神的に応えた。まるで浮気でもしてそれがばれたという

修羅場の名残のような状態に見えかねない。いや実際そう見られていたのだろう。周囲から微かに笑い声が聞こえたような気がする。健太郎は感じていた。

「はあ……。まあいつまでもこうしてても始まらないからな。元気出していくか」

そう言いはするもののここまでの間に色々起こったことを鑑みるとこれからも何かよからぬことが起こりそうな予感がしてならない。そう思うと口で言ってることと実際の様子はかけ離れていく。前向

きなことを言っているのにテンションは下がっていく一方である。

時間は現在既に英語が始まっている頃合である。千紗に殴られたゴタゴタで時間を随分と無駄にしたため予定よりも一本後の電車に乗ることを余儀なくされた結果がこれである。テンションが下がるのも無理はなかった。

隣では反省したのかすっかり落ち込んでいる千紗がいる。失礼な言動が多々あったとはいえ手を出してしまったことに罪悪感を感じているのであろう。千紗はせっかくに大学に来たというのに周りを見渡すこともなく俯いてしまっている。

（せっかく大学に来たっていうのにこんなんじゃないいい体験にならないよなあ。俺が引っ張っていかなくちゃ）

使命感を強く感じた健太郎は落ち込んでいたテンションを無理矢理高揚させるため、頬を両手で叩いて気合を入れる。

「おしっ！ それじゃ構内を見て回るか、千紗。そんで見て回ったら学食で昼飯でも食べようぜ」

「は、はい。そうですね……」

まだ元気というには程遠いが、見て回る内にテンションも上がっていきだろうと健太郎はこの場ではあえて無理に元気を出すよう執着しなかった。千紗を促して構内をゆっくり歩いていく。

健太郎がまず向かおうとしているのは連絡掲示板や履修等の手続きでお世話になる管理棟であった。管理棟には教授等の研究室や共同研究室、更には大講義室や学食もここに入っている。本来ならば学食もあるため最後に回したい場所だが、まずは休講情報や個人連絡がないかをチェックしておかないといけない。登校したらまずは管理棟というのが日常の決まったパターンとして定着している。

管理棟は大学内の真ん中辺りに位置しており、講義棟と並んで建っている。高さが違うもののツインタワーとして大学の名物的な建物になっている。そして管理棟の側には人工的な水路が作っており、管理棟の対岸には芝生が植えられているなど環境も配慮した設計になっている。健太郎も時折昼ご飯を持って、この芝生に座り込み、

のんびりと昼休みを過ごすこともある。

このようなまるで高校とは違った風景に千紗は圧倒されていた。まずはツインタワーに目を釘付けにされ、そして次に水路と芝生に驚かされる。先ほどのまでのテンションの低さはすっかり改善されていた。

「す、すごいです……。高校とは全然違うんですね」

「まあ大学によって景観はだいぶ違うとは思うけどな。ここは環境に力を入れてみたいだし」

「これが大学……」

千紗は憧れを抱いた目で管理棟を見つめている。田舎から出てきて都会の風景は見たものの、大学となるとそれらの風景とはまた違ったものを感じさせるのだろう。実際健太郎もオープンキャンパスにて構内、教室、テニスコートや屋内プールなどを見て驚いたことがあった。

これまでずっと都会といわれる地で育ってきた自分でも大学を初めて見た時は憧れや物珍しさで頭が一杯になった。これまでの学校観とはだいぶ違いが生じるのである。

しかし物珍しいからといっていつまでもここでボーっと突っ立っているわけにもいかない。健太郎は管理棟を見つめる千紗に移動するように促して再び歩き始める。まずは管理棟に入って掲示板を確認する。ドアを開けて管理棟の中に入ると千紗はやはり新鮮な光景にまた歩を止めてしまいそうになるものの、健太郎は気にせず歩みを続けるとそれに気付いた千紗は置いていかれては堪らないと健太郎に追いつがる。

入り口入って真っすぐ行くと左手に休講情報が書かれたボードがある。まずはここで本日の休講、そして先の休講もチェックしておくのが健太郎の日課である。休講であるのに朝一番から出て行くというお馬鹿な状態を避けるためには必ず必要な行動である。

健太郎がいつものように休講情報を眺めていると数人の学生が健太郎と千紗に近寄ってきた。それに先に気付いたのは千紗で焦りな

から健太郎の脇を肘で突く。いきなりなんだと健太郎はまず千紗に視線を向ける。そして千紗は健太郎が視線を自分に向けたと気付くとすぐに

顔で学生が歩いてくる方向を指す。

そのジェスチャーを汲み取り、顔をそちらの方向に向けた健太郎は途端に怪訝な表情になった。

「あれ？ 木下に小久保、それに中島と片平じゃないか。お前ら英語の授業はどうしたの？」

本来であれば今頃は教室で英語の授業を受けているはずの同学科の同級生が目の前にいることに健太郎は疑問を持った。その質問に健太郎の男友達である木下義人が嬉しそうに説明をし始める。

「今日学校来たら休講ってなってよ。いや、嬉しいね。英語はよく当てられるから寝れないんだよなあ」

不真面目な言を吐く義人の説明を聞いた健太郎は視線を掲示板に向ける。すると成程、確かに当日休講を示す赤文字で英語の授業名が記されている。とりあえずこれで遅刻でも欠席でもなくなったと健太郎は気持ちになった。これで何に気兼ねすることもなく正々堂々と構内を案内することが出来る。そう考えていた健太郎だったが考えが甘かった。

同学科の同級生が集まった中、見知らぬ女子が一人健太郎の横に立っているのである。当然のように彼らはそこに食いつき始める。

「おい、浅井……。その子誰だ？ 俺は見かけたことないんだけど」
恐る恐る中島が健太郎に質問を投げかけてくる。どうやら中島は同じ大学内の学生だと思っているようだ。どこの学科なのか、先輩なのかそれとも同級生かと彼らが聞きたいことは色々あるであろうと一瞬で悟った健太郎はどう対応すべきかと頭をフル回転させ始める。

別に千紗がこの大学の学生じゃないと言ったところで特に問題はないだろう。目の前にいる四人は特に知らないという人間でもなく先生には黙っていてくれと頼めば二つ返事で承諾してくれるはずで

ある。それどころかお調子者の義人であればむしろ面白そうと積極的に協力してくれるかもしれない。そう頭の中で計算した健太郎は思い切って事情を素直に説明することにした。

「ああ、こいつは石川千紗っていったな、この大学の学生じゃない」「やっぱりか。道理で見たことないはずだ」

納得したように中島は頷く。この男の場合はこれで済むのだが、少なくともこれだけでは済まない者が一人いる。そしてそいつはすかさず健太郎に更なる質問を浴びせかける。

「それでその子はどうしてここにいるんだ？ お前の彼女だから？」「はあ!？」

あっさりしている中島とは違ってもう一人の男子、木下義人は更に踏み込んでくる。そしてその一言が呼び水となり、一気に周囲を活性化させる。大好きな恋愛話に反応した片平が参戦してきたのである。

「えっ？ この子、浅井君の彼女なの？ ねえねえ、どうなの？」

「片平まで……。違うって。そんなじゃない」

「じゃあ何で大学まで連れてきてんだよ。一時も離れたくないからとかじゃねえのか？」

「アホか。そんなやつ聞いたことない。マンガの読みすぎだ」

健太郎が義人と片平の集中攻撃を受けている間に中島はそれを見て笑っているだけだったが、もう一人の女子、小久保耀子は動き出していた。健太郎が必死に防戦している姿を見てどうすればいいのかわからなくなっている千紗に耀子は近付いていく。そして千紗の横に並ぶと

小さな声で千紗に話しかけ始めた。

「ねえ、あんたって本当のどこどうなの？ 浅井君の彼女なの？」「えっ？」

突然話しかけられた千紗は呆然としてしまう。自己紹介も何もないまま話しかけられればこうなるのは当然だが、そんな態度に腹が立ったのか耀子は少し苛々しながらもう一度同じことを質問してい

く。

「はっきりしなさいよ。浅井君の彼女なの？」

「ち、違いますよ。私はただ家に住まわせてもらっている居候です」
健太郎が願ったこととは反する答えだったが、下手に家族ですな
どと言うと余計な勘違いを生みだす恐れがあると判断した千紗はそ
う答えた。

割と上手いこと言えたのではと思った千紗だったが、その回答を
聞いた耀子は次第に震えながら顔を紅潮させていく。何故そんな状
態になっていくのか全くわからなかった千紗は再びうろたえ始める。
そして千紗が思い至った考えは耀子が自分の言を信じかねている
というものだった。そこで念を押そうと千紗は細かく説明していく。
「私、お金がなくなっちゃってホームレスになってしまったんです
けど、健太郎さんに助けてもらったんです。そして家がないと危な
いからって住まわせてくれたんです。本当ですよ？」

「……」

千紗が細かく説明するほどに耀子の表情が陰しくなり、震えも大
きくなっていく。どうしたらいいのかわからなくなってきた千紗だ
が、健太郎の方を見ると義人と片平の猛攻を受けて防戦一方の状態
である。援軍は期待できそうにないと判断した千紗は何とかしなく
てはと耀子の方へ再び向き直ると耀子は不機嫌な表情のまま口を開
き始めた。

「汚い女ね」

「えっ？」

「可哀そうな自分を見せ付けて家に転がり込むなんて汚いって言っ
てるのよ」

「そういえばそうですね。長いことホームレスしてましたから、そ
んなのが転がり込んだら家が汚くなっちゃいますよね。でも今は大
丈夫ですよ。お風呂にも毎日入って清潔です」

「そういう意味じゃないわよっ！ 巧妙な策略で上手いこと家に上
がりこんで住み着くなんて汚いって言ってるのよ」

「策略も何も健太郎さんとは偶然出会って……」

「健太郎さん！？ 何、下の名前で呼んでるのよ。彼女面でもしてるつもり？」

「そんなつもりは……」

千紗は困り果てた。全く取り付く島もない。千紗が説明をしようと試みても相手には全く聞き入れるつもりはないようだ。この険悪な雰囲気気付いた中島が何とか健太郎に伝えようとするが、そちらはそちらで怒涛の質問攻めでどうにもなりそうにない。結局おろおろする人間が増えただけで終わった。

その間にも耀子の口撃は止むことがない。千紗はもう弁明する気力も尽き果てていた。こんな人間には出会ったことがないと改めて都会の怖さを知ったような様子である。黙ったままにいる千紗に対していい気になったのか耀子はますます饒舌になっていく。

「だいたいね、浅井君にはあんたみたいなみすぼらしい女は似合わないわよ。私みたいな女の方が似合ってるのよ」

そう言う耀子は少しポーズを決めてみせ、自分の魅力をアピールする。茶色の少しウェーブがかかったセミロングヘアに整った顔立ちは確かに自分で言うだけあって魅力的である。スタイルもよく、まさに完璧な容姿である。

千紗に自分の容姿を見せつけ、悦に入った耀子だったが千紗の様子を見ようと視線を移すと途端に衝撃に襲われた。自慢のスタイルのはずが千紗を見るとそのスタイルは耀子を凌駕するものだった。

特に胸の大きさは耀子の逆鱗に触れるほどのもので耀子は悔しそうな顔をしながら、千紗の胸を両手で握り始めた。

「何でこんな大きいのよ……。おかしいじゃない。こんなにみすぼらしくせに」

「ちょ、ちょっとやめてください！ お願いですから揉まないで下さい！」

突然の耀子の奇行に千紗は頬を染めながら必死に抵抗する。ぶつぶつ呟きながら千紗の胸を揉み続ける耀子の姿はおかしいを通り越

してもはや恐怖を感じさせていた。

「はっ!？」 この胸で浅井君を誑かしたのね。汚い。汚すぎるわっ!」

「今度は何ですか……」

小さく呟きながら千紗の胸を揉んでいたかと思うと今度は吼え始める。千紗はもう付いていけないと半ば諦めながらなされるがままになっていた。

「この胸が相手じゃ勝てないじゃない……。浅井君が汚されていつちやう……」

「だから何度も言ってるように健太郎さんとは何もないですから……」

勝手な妄想で一喜一憂している耀子に振り回されて千紗は疲れきっていた。もうここまでくれば鈍感な千紗でも気付いていた。耀子がかここまで千紗に突っかかってくるのは健太郎のことを好きだからだ。そしてその健太郎と一緒に住んでいる千紗はどんな人間であろうと耀子の中では不倶戴天の敵のため、攻撃せずにはいられないということ。

そう悟ったからには千紗はもう耀子と関わりたくなかった。しかし向こうは見たくもない相手のはずなのに積極的に突っかかってくる。そこが何とも厄介だった。

「何もないって言っても同じ家に住んでるんだから何か起こるかもしれないじゃない。例えばお風呂場で鉢合わせちゃったとか……」

「あっ、それはありました」

「何っ!？」

耀子の挙げた例に素直に反応してしまった千紗。そして反応してから口到手を当てる。全く逆効果だった。自分の言をなかったことにするどころか信憑性を増す効果しかない。そしてそれに素早く耀子も反応する。もう後の祭りであった。

「鉢合わせたの?」

目を光らせながら千紗に詰め寄る耀子。ちゃんと聞こえたはずな

のにもう一度確認を迫るところがいやらしい。千紗はそう思ったが、とても恐ろしくて口には出せない。しかし耀子はその沈黙でさえも勝手に肯定と受け取ってしまう。

そして更に質問を千紗に浴びせかけてくる。

「ど、どうだった？ 逞しい体だった？」

「……えっ？」

声を若干トーンダウンしながら千紗に尋ねる耀子。千紗にはその質問は予想外で思わず間の抜けた声を出してしまう。

（そ、そっち！？）

間の抜けた声の後、千紗は心の中で激しく耀子に突っ込みを入れる。普通鉢合わせたと言ったら先に出てくるのは自分が見られた側でそっちではないだろうと千紗は思った。どうやら耀子の頭の中での約束は男の方が見られてしまう側らしい。

「見たんでしょ？ 浅井君の裸。いいなあハアハア……」

頬を上気させながら息を荒くする耀子を見て千紗はこれは余程特異な人だと思った。他に都会にはどういう人間がいるかは知らないが、少なくとも絶対的な少数派だろうと本能で判断した。そしてこういう人とは付き合わない方がいいとも判断した。

しかしそんな千紗の判断も虚しく、何かのスイッチがオンになった耀子はますます千紗に絡んでくる。

「居候してるってことはおいしいハプニング満載じゃない……。あつ、そうだ！」

何かを閃いたらしい耀子に千紗は嫌な予感を感じた。出来得ればこの場から離脱したいが、何か離れられない力を耀子から感じていた。

そんな風に千紗が立ち竦んでいると耀子は自分の鞆からデジカメを取り出して千紗の手に握らせる。そして次に何やら紙に書いてそのメモも千紗に手渡す。

千紗がメモの方を見てみると、『小久保耀子』という名前と何やら数字が羅列してある。千紗はこれが電話番号だということには気

付けたが、もう片方のデジカメは一体何なのかといった顔で見つめている。

「あ、あの……これは何ですか？ カメラみたいですけど……」

「えっ？ デジカメだけど、知らないの？」

「は、はい。私すごい田舎から出てきたので」

千紗は少し恥ずかしそうにそう答える。しかし耀子はそんなことは別にどうでもよいと言わんばかりに話をどんどん進めていく。

「これでさ……。浅井君の写真を撮ってきてくれない？」

「ええっ！？ 撮ってどうするんですか？」

「決まってるじゃない。コレクションよ。部屋に飾るのよ」

気持ち悪い。今の千紗の心境はまさにその一言だった。千紗の頭の中に耀子の部屋の想像図が広がっていく。その光景は部屋一面に貼り付けられた健太郎の写真。そしてその空間の中で悦に入る耀子の姿。思わず千紗は身震いしてしまう。アイドルといった芸能人ならともかく

単なる一般人の写真というのが余計に身震いをさせる。完全に恐怖しか感じさせない部屋である。

健太郎をそんなことに巻き込むわけにはいかないと千紗は断固拒否の意志を固める。それに第一先ほどまで言いたい放題してくれた人間にそこまでしなければならぬ義理などない。

「私、そんなことする気なんて……」

千紗が拒否の言葉を口にしようとする刹那、耀子はそれを素早く察知した。そして最後まで言わせないと千紗の言葉を遮って間に割り込んでいく。

「もしあなたが断るなら、この学校にこっそり忍び込んでいることを先生にばらすわよ」

「ええっ！？ な、なんでそんな話になるんですか！？」

「当たり前じゃない。あいての弱みを狙って交渉する。こんな有利な条件が揃ってるのに使わない手はないわよ」

「ううううう……」

「もしばれたら部外者を勝手に大学の敷地内に入れた浅井君はどうなっちゃうかなあ？」

「うううううう……」

「もしかしたら退学になっちゃうかもね」

「そ、そんな……」

「あなたの態度次第では黙っててあげてもいいんだけどなあ」

「……わかりました。喜んでお手伝いさせていただきます」

「なかなか話がわかるじゃない。見所あるわよ」

交渉に勝った耀子は千紗と無理矢理握手しながら微笑む。一方の千紗は脅されたとはいえ健太郎のプライバシーを侵害する行動をしなければならなかったことに罪悪感を感じていた。そして目の前でこれからのことを想像してかだらしく鼻の下を伸ばしている耀子と共犯者に

ならなければならぬことに強いショックを受けてもいた。変態という同類項で括られてしまうことが堪らなく嫌だったのである。

千紗はため息を吐きながら横を見るとどうやら質問攻めはかわしきつたらしく和やかに雑談をしている健太郎の姿が目に入った。こっちはとんでもない事態になっているというのに暢気に雑談をしていることに少しイラつときた千紗だったが、これから先耀子との契約によってあられもない写真を撮られかねないことを思うと不憫にも感じた。

「ごめんなさい健太郎さん。でもこうするしか道はないんです」

千紗は小さく呟きながら懺悔をする。隣にいる変態に生贄として捧げたことを詫びた千紗だったが、改めてその変態こと小久保耀子を見ると勿体無いと思わずにはいられなかった。見た目は確かに綺麗だというのに中身は完全にストーカー気質の危ない人物である。

これがまだ

綺麗な見た目だからこそ耐えられたが、これが危ない男だったりすると未遂の時点でも通報モノである。だが、見た目で緩和されてる分要注意とも言える。とにかく厄介な人物に捕まってしまったこと

には違いない。

「それじゃ、そろそろ昼飯でも行くか。おい、千紗学食行くぞ」

雑談も一段落ついたのか昼食を取ろうと千紗に呼びかける健太郎。隣では呼びかけられた千紗以上に素早く反応して健太郎に近付いていく耀子の姿がある。積極的に健太郎の隣を占めて歩き始める様子は周りからは仲のいい同級生、友人、もしくは恋人同士に見えるが、千紗には

餌を見つけた肉食獣と狙われた草食動物にしか見えない。ちっとも微笑ましいものではなかった。

自分の決断は果たして正解だったのだろうかと思ひながら千紗は健太郎らの後ろについて行くのだった。

六人で昼食を食べ終わった後、健太郎と千紗は次の授業がある教室に移動していた。メンバーは健太郎、千紗、そして義人の三人である。他の三人は違う授業を取っているため途中で別れていた。千紗にとっては悩みの種である耀子と離れることが出来たことが何よりも嬉しかった。

一方でそんな事情など一切知らない健太郎は学校内を千紗に説明しながら歩いている。耀子と離れた今、千紗はようやく大学を心から楽しんで見られそうだった。

「これまで外観とか学食は見てきたけど、ようやく教室のお披露目だな」

「はい。楽しみです」

千紗はこれまでの経緯もあって授業を尚更楽しみにしていた。そうでなければ大学生活の初体験が嫌なものとしか認識されなくなってしまう。素直に楽しみと言ってくれる千紗に満足したのか健太郎は足取りも自然軽くなっていた。

そんな二人を眺めながら一人蚊帳の外へと放り出され気味の義人は何とか存在をアピールしようと話に割り込んでくる。

「これから授業を見学してみても面白そうだったら千紗ちゃんもうち

の大学に入ればいいんじゃない？」

「そ、そんなお金ありませんよ。私、元々はホームレスだったんですよ」

「バイトしながらとか奨学金制度とか使えば何とかなるんじゃない？」

「でも……」

これまで蚊帳の外へと出されていた分を取り返すかのように義人は千紗に捲くし立てる。対応に困った千紗は健太郎の方を見て助け舟を求める。

「おい義人。その辺にしとけよ。千紗が困ってるじゃないか」

「でも千紗ちゃんが大学入ったら楽しくなりそうじゃね？　もう耀子とも仲良くなったみたいだしさ」

義人の口から出てきた耀子という単語に千紗は敏感に反応する。出来れば今日はもう聞きたくない単語だったが、そこで露骨に嫌な顔をするわけにもいかず、何とか笑顔を作りながら誤魔化しにかかる。

「そうですね。気さくに話してくれましたので」

「まあそうやって知人の輪が広がったのなら連れてきて正解だったかな」

健太郎は千紗を大学に連れてきてよかったと安心する。なんだかんだで見知らぬ環境へと千紗を引っ張り込むことに不安も感じていたのである。とりあえず上手いこといってくれたと判断しているようだが、その実千紗はとんでもない爆弾を抱え込むことになってしまっているということには気付きようもなかった。

義人と二人でやっぱ連れてきてよかったなどと言いながら歩いている健太郎は突如、その歩みを止めて千紗の方へ向き直る。健太郎と義人の正面には扉がある。どうやら教室に着いたらしい。

「次の授業はここの教室でやることになる。とうとう千紗の授業初体験だな」

そう言いながら扉のノブに手を掛ける健太郎。初めて見ることに

なる大学の教室に幾分か緊張しながら千紗は扉が開くその瞬間を待つ。

健太郎がノブをぐっと回し、扉を押し開けると千紗の目の前に教室の全容が広がっていた。椅子、机、教卓などが置かれている教室だが、千紗にとっては予想外というような感想が頭に浮かんできた。「あ、あの……。あまり高校と変わらないんですね？」

目の前に広がった教室の光景は机も椅子も高校時代の教室と大差ないものだった。せいぜい違うところといえば高校の教室では黒板だったものがホワイトボードになっているぐらいである。

そのことに関しては健太郎も自覚しているらしく頭を掻きながら苦笑いをしている。

「そう思うよなあ。俺も最初入ったときにはこれが大学の教室かと目を疑ったからなあ」

健太郎の言に義人も頷いている。どうやら皆最初はそう感じたようである。

「ただ高校の教室に比べてちょっと広いかなってぐらいだもんなあ」

「俺は大学の教室っていうと、三人ぐらいで使う長い机があって、後ろに行くにつれてどんどん段が高くなっていくようなのを想像してたよ」

健太郎がそう自分の想像図を話すと千紗はそれだと言わんばかりに首を縦に振る。どうやら健太郎も千紗も義人も同じような教室図を思い描いていたようである。

「まあ、とにかくどっか座ろうぜ。三人で固まるところはつと……」

義人はそう言うのと辺りを見渡しながら席を探す。昼食を賑やかに取っている間にだいぶ時間が経っていたらしく、席はけっこう埋まってきた。授業開始まであと十分。まだ時間に余裕はあるのにこんなに埋まっているとは真面目な学生が多いなと義人は小さく愚痴る。

だが、ちょうど奥の方に三人固まって座れる所を発見した義人は

健太郎と千紗を連れてそこへと移動する。健太郎としては千紗を連れて他の人の間を通り抜けていくのは少し不安だったが、幸い不審に思う人はいなかったようである。まだ授業は五回程度しか行われていないので、同じ授業を取っている人間をよく覚えていてる人などそういない。いたとしても教師ぐらいであろう。

奥の窓際の席にまで移動した三人はそこに座る。健太郎と千紗が隣同士に、そしてその前に義人という配置である。

「とりあえず固まって座れてよかったな」

健太郎がまずは上々の首尾と胸を撫で下ろす。さすがに初めての、ましてや無断参加の大学の授業で千紗と離れ離れというのは不味いと思っただけに上手いこと乗り越えて安心したのであろう。

「それにしても千紗ちゃん大丈夫？　大学の授業は九十分間だよ？」

義人が千紗に長時間の授業に耐えられるかと尋ねる。高校までとは授業時間がかなり違うことに最初の内はなかなか慣れなかった経験があるのだろう。健太郎も心配そうな表情で千紗を見ている。

「大丈夫ですよ。それぐらいなら」

「そっか。まあ辛くなったら遠慮なく教室から出るなりなんなりすればいいからな。この授業はけっこうさういふところ緩いから」

「はい。わかりました」

千紗が健太郎の説明に返事をしていると教室前方の扉が開き、教師が入ってきた。授業開始まであとまだ五分もある。なかなか真面目な教師である。手に持っていた大量のプリントを机に並べていき、学生にプリントを取りに来るよう指示する。いよいよ授業が始まると思った千紗は初めての大学の授業を心から楽しみにしてプリントを取りに行った。

「それで今日はどうだった？」

夕方、今日の授業を終えた健太郎と千紗は二人並んで帰っている。健太郎は今日の感想を千紗に尋ねると千紗は満面の笑みを浮かべた。「すごい楽しかったです。あれが大学なんですね」

「それはよかった。しかし難関の英語が休講でよかった」

「それにしても案外外部者がいてもわかんないものなんですね」

「出欠を取るかよっぽど受講者の少ない授業でもないとなかなか覚えられないだろうな」

今日一日を振り返る二人は実に充実した表情で歩いていた。もう千紗には無断で大学へと立ち入ったどころか授業まで受けてくるということに罪悪感は消えていた。それほど楽しく充実した一日だったのだろう。

だが、その代わり新たな悩みの種が浮上したことが千紗に暗い影を落としていた。健太郎を異常なほど慕う小久保耀子によって脅されて手渡されたデジカメがひどく重く感じられた。

（これさえなければ最高だったのになあ……）

千紗の表情はふっと曇った。これから先耀子に求められるまま健太郎のプライベートシーを侵害しなくてはならないと思うと気も重くなるものだった。無断で大学へと立ち入り授業に参加したという弱みを握られている以上仕方がなかった。

（いくら健太郎さんが提案してくれたことでも、それで私が楽しんだんだから迷惑をかけるわけにはいかない）

これを健太郎に告げ口してしまったら、確かに健太郎のプライバシーは守られるが、その代わりに友達とギクシャクし、大学から何もか言われてしまうかもしれない。それは避けたかった。それならばまだプライベート写真の方がマシなのではという方向性である。

（これが原因で大学にいられなくなったりしたら大問題です……。あれ？）

千紗は色々悩んでいる内にふとそこまで自分が追い詰められているのだろうかと思い始めた。もう既に自分が学校にいたという事実は健太郎、義人、耀子、中島、片平しか知らない。健太郎と一緒に黙っていてももらうことを願えば、もし耀子が告げ口して大学から何か聞かれても黙っていてくれるのではないだろうか。

それに耀子としても友人とギクシャクしたくはないだろう。だか

ら完全に何もなく手打ちとはいかないが、今よりは有利な条件での着地点へと持っていけそうである。

そのことに気が付いた千紗はそうなるこそ今まで気を重くすることでもないと思った。それにあまりこのことを考えすぎて気を落としていては健太郎に勘付かれてしまう。千紗としてはこのことは出来るだけ自分で処理をしたかった。

「もうすぐ家に着くな。今日の夕飯はどうする？」

家も近付いてきたところで健太郎は千紗の方を見て夕飯をどうするか尋ねる。このままついでに買い物をしていくか、それとも今日のところは家にあるもので済ますのか、もしくは外で食べるのかといったところか。

千紗は帰ったらすぐ耀子に対処しようと考えていたので、家にあるものでいいかと思った。

「今日は家にあるもので済まいませんか？」

「まあ、明日はチラシも入るしな。それじゃ今日はあるもんで済ますか」

家にあるもので簡単に済まそうと決定したので二人はそのまま家へと真っすぐ帰る。家までたどり着き、玄関を抜けて自分の部屋へと入ると千紗はすぐさま電話へと向かう。一階の階段脇に置いてある電話を使うのだが、健太郎がいつ通りかかるかわからないため不安もあった。

千紗は電話の側まで来てから迷い始めた。やはり健太郎が通りかからないか気になるのである。辺りをきよろきよろ窺いながら電話を使うべきか少し待つべきか逡巡している。

そんな風に千紗が不審な動きをしていると二階からドアが閉まる音が聞こえ、更に階段を降りてくる音が聞こえてきた。健太郎である。千紗はやっぱり電話するのを待ってよかったと心底安堵した。

「おっ、千紗。何やってるんだ？」

「あっ、いえちょっと……」

階段を降りてきて千紗を見つけた健太郎は何気なく質問を投げか

ける。一方の投げかけられた千紗は言葉に詰まる。電話を掛けるところなど言えばまず間違いなく誰にと返ってくるだろう。

しかしどう返すべきかと悩んでいる千紗を特に気にせず健太郎は通り過ぎようとする。

「まあ、いいや。俺は風呂入ってくるから。飯はその後でいいか？」

「は、はいっ！ どうぞゆっくり入ってきてください。私には構わなくていいですから！」

健太郎の言葉に助かったと感じた千紗は過剰に謙る。これも不審といえば不審な行動だが、元々遠慮しがちな千紗ということもあって気に掛かるほどではなかったようで、健太郎はそのまま風呂へと向かった。

これほどの好機はないと千紗は急いで耀子から渡されたメモを見て電話を掛ける。一回、二回と耳に入ってくるコールがもどかしい（早く出てほしいけどそうでもないような……。不思議な感覚ですね……。）

千紗が緊張して待っていると、四回目のコールの途中でようやくコールが途切れ、どうやら耀子が電話を取ったようだ。ここからが勝負である。

「もしもしっ！ 浅井君！？」

「きゃっ！」

突然鼓膜が破れるかと思うほどの大音量の声が聞こえてきた。千紗は思わず悲鳴を上げて受話器を耳から遠ざける。その間にも受話器からは耳から離していても明瞭に聞こえてくるほどの大音量が鳴り響いている。

「あ、浅井君から電話が掛かってくるなんて……。ハアハア」

「あの……。もしもし？」

少しだけ音量が下がったためようやく受話器に耳を近付けれるようになった千紗はとりあえず応答しなくてはと声をかける。受話器から漏れてくる怪しい吐息にうんざりしたが、ここで切るわけにはいかない。まだ目的を達成していないのだから。

「女の声!? 誰よあんたっ!」

「私です。石川千紗ですよ」

受話器から女の声が聞こえてきたことに立腹らしい耀子の罵声に耳をやられそうになるが、耐えて千紗はとりあえず名乗る。名前さえはつきりさせれば少しは落ち着くだろうとの判断だった。

「石川千紗あ? ああ、あなたね。驚かせないでよ」

千紗からすれば散々大声でこっちを驚かせておいて何を言うかといった感じだが、今はそんなことよりも当初の目的を達するほうが大事である。早速用件に入ろうと気を取り直す。

「あの、今日のお昼の件なんですけど……」

「ああ、あれね。……何っ!? もう何か撮れたの!?!」

「ひっ! と、突然大声を出すのは止めてくださいよ」

「仕方ないでしょ、本能がそうさせるんだから。そ、それでどんな写真?」

もう千紗が何かお宝写真を撮ったのだと早合点した耀子は息を荒くしながら千紗の返事を待つ。千紗は人から好意を抱かれることはよいことだとこれまでの人生では思っていたが、耀子の行動を見ていると一概にそうは言えないと思うようになっていた。人から鼻息を荒くするほど想われる。千紗はそれを想像すると思わず身震いをしてしまった。

これは絶対に止めなくてはと改めて気合を入れ直した千紗は強気に自分の意見を話していく。

「お昼のことですけど、私やっぱり出来ません。それにしなくてはならないと思います」

「……。はあ? 何言っちゃってんのあんた。浅井君が退学になってもいいの?」

「でも私が無断で授業に参加したっていう証拠はもうないんですよ?」

これは健太郎の友人等と会ったということとで全くのハツタリであったが、一番ダメージがないのはこれが上手くいことだった。そ

れでも耀子の目の前で他の友達にも自己紹介までしたのだから、さすがにこれは通用しないだろうと千紗は次の作戦も用意し始める。あくまでこれは会話を繋いで時間稼ぎにしかないのである。

出来得るならば色々策を用意するために長く引っ張りたいと千紗は考えていたが、その願いは呆気なく散った。

「ああっ！　しまった。あんた、大学から出ちゃったら駄目じゃない！」

ものすごく簡単に上手くいってしまった。千紗は聊か拍子抜けしながらもこれ以上ない展開を無駄にしないために畳み掛けていく。

「そうですよ。私が大学から出ちゃった以上もう私の勝ちです。諦めてください」

「くう、詰めが甘かったか。……ねえ、一枚ぐらいお情けでくれない？」

「駄目です。諦めてください」

「お願い！　失敗しちゃった以上もう手立てはお願いしかないのよ。これ以上無茶は言わないからさ。ねっ？」

しつこく縋ってくる耀子に千紗はどうしたものかと悩んだが、無碍に断るよりも一枚何かを渡して満足してもらう方がいいかもしれないと考えるようになっていた。それにここで満足してもらわないといつか気付いた時にまた要求が来そうで怖い。

ここは一つ恩を売っておくことにして後日に備えようと決めた千紗は渋々耀子のお願いを聞き入れる。

「わかりました。それでは一枚だけ撮って持って行きますからそれで我慢してください」

「本当に！？　ラッキー、言ってみるものね」

心底嬉しそうにしている耀子の様子に千紗は少し不憫だなと感じていた。本当であれば証拠など自分の友達から得ることが出来るかもしれないのにそこに全く気が付かないで、かなりレベルを下げられた条件で満足する耀子にそれまでの悪い印象が大分改善されていた。

これで狡猾に千紗と交渉を続けるようであれば陰湿で変態な女としか見れなかったが、この態度で少し間の抜けた可愛い変態の女と見るようになっていた。千紗は自分も生粋の田舎育ちで都会では世間知らずの間の抜けた女と見られていると感じていたが、そんな千紗にさえ言い包められてしまう耀子の間の抜けようにどこか同類項としての親しみすら感じ始めていた。

「それでは今度写真を持っていきますから」

「お願いね！ はああああ……、それまでどうやってこの昂ぶりを抑えておけば……」

そこから先は聞きたくなかった千紗は急いで電話を切る。放っておくとピンク色の世界が受話器から広がってきかねない。とりあえず当初の目的は達したのだからこれ以上通話する必要もない。

一仕事終えた千紗は階段に座り込む。この電話だけで体力、精神力ともにだいぶ消耗していた。最初の内は緊張感、最後の方は脱力感に襲われたためそのギャップも影響したのだろうか、かなりの消耗ぶりである。

階段に座り込んで体力の回復をしている千紗だったが、この後は晩ご飯の支度があることを思い出した。今日は大学に連れて行ってもらったことだし、そして帰りには家にあるもので済まそうと提案したこともあるのでせめて準備ぐらい先にやっていようと千紗は立ち上がってキッチンへと向かう。

千紗がキッチンへと入るとそこにはいつの間にか風呂から上がっていたらしい健太郎が腰にバスタオルを巻いただけという豪快な姿で牛乳を飲んでいた。どうやらシャワー程度で簡単に済ましたのだろう。

「きゃっ！ け、健太郎さん、もう上がっていたんですか？」

耀子の言葉のせいで余計に意識してしまった千紗は思わず顔を赤らめてしまう。それでも全裸というわけではないので背を向けたり、手で目を隠したりまではしない。

だが、健太郎の方は千紗の小さな悲鳴に反応したのか少々慌てて

いる。

「あつ、悪い。ちょっと行儀が悪かったな。すぐ着替えてくるわ」
そう言っただけで牛乳を飲み干して、キッチンから出ようとしたその瞬間、少々慌てたせいで巻き方が緩くなってしまったのであるう、バスタオルがはらりと地に落ちた。バスタオルが地に落ちると同時に千紗の両目にはダイレクトで衝撃映像が飛び込んできた。

「おわっ！ す、すまん！」

健太郎は突如起こったハプニングに慌ててバスタオルを巻きなおすが、もう手遅れだった。衝撃映像に顔を極限まで真っ赤にした千紗はその場で昏倒してしまった。

「ち、千紗！ 大丈夫か！」

慌てて駆け寄る健太郎の声が徐々に遠くなっていく。千紗は自分から離れつつある意識の中で耀子に謝った。

（耀子さん。あなたの言うお宝映像を自分一人で見えてしまったてごめんなさい）

耀子思わず歯噛みをしてしまいそうな光景の中、千紗の意識はゆっくりとシャットダウンした。

第七章 大型新人

第七章 大型新人

千紗が浅井家に住み着いてから実に一ヶ月余りが経過した。その間は千紗がバイトを始めるなど変化があったが、それでも特に何も問題なく日々が過ぎていっていた。

季節は六月。そろそろ天気がすっきりしない日も増え、徐々に蒸し暑くなってきた。千紗の地元は割りと寒冷的な地方らしく慣れない暑さに苦しんでいた。

「暑いです。べたべたして気持ち悪いです」

リビングのソファーに寝そべりながら、だらけ切った声を出す千紗はもうすっかり浅井家に馴染んでいた。暑いと言いながら寝そべるなどかつての千紗からは考えられない程の態度である。

最近はまだ目立って気温が高いわけではないが、今日はよく晴れて気温が上がったし、更に高い湿度によって蒸し暑さは今季最高かもしれない程だった。そのため千紗はTシャツをだらしく捲り上げてへそが丸見えになっている。

蒸し暑さが増すにつれて露出が多くなる千紗に健太郎は目のやり場に困り始めていた。なまじスタイルが抜群なだけに厄介なものであった。

「おい、ちょっとは恥じらいを持て」

こう健太郎は毎回注意をするのだが、千紗は一向にそれを聞き入れる気はない。以前であればその指摘に顔を赤らめながら、服装を直しにかかるのであったが、もう今では慣れたのかそんな様子も見せない。

「でも街ではこんな格好で歩いている子結構いますよ？」

それどころかこんな屁理屈を捏ねては健太郎の指摘を却下する。最近バイト代が入ったためか服やアクセサリーなどを買うように

なった千紗はもう世間知らずな田舎少女ではなくなっていた。雑誌も読んでいるようだし、時折CDを買ってくる姿も見受けられた。

健太郎としてはそんな変化を好ましく見ていたのだが、あまり調子に乗られると不安も増える。何だかんだ言ってまだ一ヶ月しか経っていないのである。まだ単純なところや純朴なところははつきり残っているし、その上でハメをはずしすぎると何かトラブルを起こしそうで心配なのである。そんな健太郎の様子はまるで急に色気づき始めた娘を心配する父親のような姿である。

「はあ……。頼むから危ないことだけはするなよ？　まあ、色々なことに興味が涌くのはわからんこともないけどな」

「大丈夫ですよ。ちゃんと弁えています」

そう返事をする千紗を今は信じるしかない。健太郎としては出来る限り千紗に都会での生活を楽しんでほしいのだからそれを抑圧することはしたくない。何とも難しい問題だった。

そんな風に健太郎が悩んでいると千紗は突然ソファから起き上がり、リビングを出て二階へと上がっていく。いきなり何だと気になった健太郎は千紗の後を付いていく。健太郎が階段を上がっていくと既に階段を上がりきって自室へと入ったらしい千紗が部屋から出てきて、階段を降りようとするところにぶつかった。

「おい、いきなりどうしたんだ？」

千紗の不審な行動に健太郎は何をするつもりなのかを聞いたです。

「今からちょっとコンビニに行こうかなと。アイスが食べたくなつて」

「お前、俺の話聞いてた？　危ないことは止めろと言ったばかりだろうが」

千紗の行動に健太郎は苦言を呈する。女の子が夜道を一人歩きしようなどというのは危険な最たるものの一つである。千紗はどうやら自分の魅力に対する理解が不十分らしく薄着で外に出ようとしている。これはもう健太郎にとっては問題外の行動だった。

「とにかくもう夜十時なんだから駄目だ。アイスぐらい明日でもいい

いだろ」

「今食べたいんですよ。暑いじゃないですか」

「お茶でも飲んどけ」

「甘い物が食べたいんですよ」

千紗は全く引く姿勢を見せず、執拗に粘る。この辺りも以前ならば健太郎の言うことに従って今頃は渋々諦めてお茶を飲むなりしていただろうが、今では自分の意志をなかなか引つ込めない。良くなつたとも言えるし悪くなつたとも言える微妙な変化だった。

とにかく引く姿勢を見せない千紗に健太郎は苦慮していた。このままではいつまで経っても埒が明かない。どうにか千紗が納得して自分も納得できる着地点を探したいところであつたが、なかなかそれが浮かんでこない。千紗があの様子である以上解決は健太郎の方で行わなければならなかつた。

「そんなにアイスが食いたいのかよ」

「食べたいです。私の田舎に比べると種類がすごい多くてどれも食べなくなっちゃいますよね」

幸せそうに頬を緩ませる千紗を見ると健太郎としては禁句と分かつていてもあの言葉を言わざるを得なかつた。

「……太るぞ」

その言葉を聴いた瞬間、千紗の動きが止まる。そしてゆっくり健太郎の顔へと視線を動かし、にっこり微笑む。しかしその表情は明らかに怒りを感じさせるものだった。

「健太郎さん。今、何て言いましたか？」

「あっ、いや、すまん。失言だった」

本当は失言でもなんでもなく言おうとして言ったことだったが、千紗の威圧感に思わず謝ってしまう。どうやら今の禁句は純朴な少女ですら鬼へと変貌させる危険な単語だったらしい。

千紗ですらこの有様なことから他の女の子の場合はどうだろうかと思像すると健太郎は何を間違ってもこれだけは言わないでおうと強く肝に銘じた。

千紗を怒らせてしまった健太郎は明らかに自分が悪いのだからという詫びの気持ちと、ご機嫌をとるために千紗に一つの提案をする。そしてその提案は先ほどの問題のちょうどいい着地点になるのではというものであった。

「本当にすまん。お詫びとして俺がコンビニまで一緒に行くよ」

「えっ？ いいんですか？」

健太郎の思わぬ好意に千紗の怒りはたちどころに消えていった。

健太郎に対して放っていた静かな威圧感、圧迫感もまた消えていく。

「ああ、そんなに食べたいんだったら仕方ないもんな。でも程々にな」

「あ、ありがとうございますっ！」

先ほどまでの怒りはどこにやら、高速で頭をペコペコ下げながら千紗は喜びと感謝の気持ちを表す。

そんなに頭を下げられると逆に居心地が悪くなってしまふ健太郎は千紗に少し待っていてくれと言いつつ残して自室へ向かう。部屋に入るとテキストに財布やら家の鍵やらを持ってポケットに入れる。そして再び廊下へと出て、千紗に準備が整ったとアピールをする。

「待たせたな。それじゃ行くか」

「はいっ。行きますよう」

健太郎の準備が整ったのを見ると千紗は喜び勇んで玄関まで駆け出す。そこまでアイスが楽しみなのかと健太郎は苦笑しながらも千紗が子供のように喜ぶ姿を見ると満更でもない気分になっていた。

（本当に俺、爺くさくなったなあ）

まるで娘のはしゃぎっぷりに目を細める父親のような感じに今度は自分に対して苦笑してしまう。同じ年頃の女の子と二人きりだというのに何で甘酸っぱい空気ではなく、こんな和んだ空気になるんだろうと思ひながら健太郎も玄関へと向かう。

「健太郎さん。早く行きましょう。夜遅くなつては危険です」

だったら行かなけりゃいいじゃないかと言ってしまふとまた陰悪な空気になってしまふので健太郎はわかったわかったと言うが、内

心不満である。早く行きたいからともっともらしい理由を付けて人を急かすのは止めてほしいものである。

そんなことを思いつつも、靴を履き終えた健太郎は千紗が愚図らない内に早く行こうと玄関を出る。

「そんじゃ行くか。公園近くのコンビニでいいか？」

「はい。どこでもいいです」

とりあえず行き先を決めた二人は玄関の鍵を閉めて、歩き始める。湿気の多いムツとした空気が纏わり付くが、幸い雨が降りそうな気配はなかった。

暗い夜道ではあるが、千紗はそんなことなど全然気にした風もなく歩いている。

「よく女の子の方からこんな暗い夜道を歩こうなんて言うなあ。怖くないのか？」

「だって私の田舎なんて何にも見えないですよ。それに比べればへっちゃらですよ」

明るさ暗さ云々の話ではないと健太郎は言いたかったが、もうここで暮らし始めて大分経つのだから比較的安全な道、危険な道ぐらい弁えてるかそれ以上は特に話を続けなかった。

公園近くのコンビニまではそんなに距離はない。それでもホームレスが住み着いている可能性のある公園があることを思うとやはり気は抜けない。どんな人間がいるかわからないから極力物音は出さないで通過したいという狙いもあって話を打ち切ったのだったが、千紗はそんな狙いなど微塵も悟らずにボリュームを下げないまま話しかけてくる。

「もうすぐですね。ああ、早くアイスを食べたいですよ」

「馬鹿っ！ やかましい！」

小声で怒鳴るといふ芸当を披露しながら健太郎は千紗の頭を軽く小突く。突然頭を小突かれた千紗は恨みがましい顔で健太郎に抗議をする。

「痛いじゃないですか！ いきなり何ですか!？」

「だからやかましい。音量を下げろ。ホームレスがいるかもしれないだろう」

健太郎のその言葉に千紗を周囲を見回す。もう既に公園へと差し掛かっていることはコンビニしか眼中にない千紗にはわかっていなかった。今更気付いたといった様子で声の音量を下げ始める。

「そうでした。もう公園に差し掛かっていたんですね」

「そうだ。だから黙ってさっさとコンビニに行くぞ」

「はい」

そう二人で意見を一致させるとどちらからともなく小走りで公園横を通り過ぎる。公園さえ通り過ぎればコンビニはすぐそこである。小走りによって少し汗ばんだ二人は冷房の涼しさも求めつつコンビニへと向かう。

コンビニの扉を開けると冷氣と共に夜のためか少しだれているらしいバイト店員のやる気のない挨拶が二人を出迎える。店内に入った二人はまずはアイスの場所に向かうのではなく、ついでだからと何か要る物はなかったかを調べるため店内をぐるっと回る。

特に必要な物はなかったが、今後の夜のお供にと適当に菓子を見繕い、そしてその後は千紗お待ちかねのアイスである。アイスがたくさん入っている容器を眺めていると千紗は幸せそうに微笑んでいる。見ているだけでも幸せといった様子である。それでも待っている方は早くしてほしいものである。健太郎は決めかねているように見える千紗を促すために声をかける。

「おい、どれにするんだ？」

「あっ、はい。あの、ちょっと迷っちゃって」

「まあ気の済むまで選べばいいさ」

あまり急かすのも可哀そうかと思いついて健太郎は時間つぶしに雑誌コーナーへ行くことにした。どうせ千紗のことだから選ぶのに時間がかかるだろう。そう思い健太郎は適当に雑誌を見繕って読み始める。

最初はマンガ雑誌を読み、気に入っている作品だけを読み終える

とまだ千紗は迷っていた。一体いつ決めるんだと思いながらも健太郎はまだ大丈夫かと次はこっそりエロ雑誌を読み始める。はつきり言って危険な行為ではあるが、そう直ぐにはアイスを決めれないだろうと高をくくった健太郎はページを捲っていく。

「そういえばあいつが来てからこういった類の雑誌を読んでなかったからなあ。微妙に懐かしい……」

女連れの男が読むものではないが、健太郎は気にせず読み続ける。どうせまだ決められないだろうと思い続けていた健太郎だが、その実結構時間は経っていた。そんなことには全く気が付かない健太郎はますます本に夢中になっていく。

「おお……。千紗に勝るとも劣らないスタイルだ……」

「誰がですか？」

「この子だよ……。うおおおっ!？」

突如背後から独り言に加わってきた千紗に健太郎は驚愕する。あまりの驚きぶりに本を閉じるのも忘れていた。彼の手には怪しい雑誌がそのまま握られている。

健太郎の背後から声をかけた千紗は健太郎の手に握られたままの雑誌をつい見てしまった。その瞬間、もう既に会計を終えたのか握っていたビニール袋を落とし、顔を真っ赤に染める。

「な、何てものを見てるんですかっ!」

「はっ!? し、しまった」

自分の手には開かれたままの雑誌がそのまま残っていることに気が付いた健太郎は急いで本を閉じて、それを棚に戻す。そして何もなかったように口笛を吹きながらすました顔で誤魔化し始める。

「ああ、もう選り終わったのか? そ、それじゃそろそろ帰るか」

「……。ええ、帰りましょうか」

深くは突っ込まないものの、明らかに警戒した様子を見せている千紗に健太郎はへこんでしまう。これならまだ詰られた方が幾分かマシである。さらに失望したといった表情までおまけで付いてくるのだから尚更堪らない。

こんな険悪な雰囲気でコンビニを出た二人は若干離れて道を歩く。千紗が前、その後ろを健太郎が歩くといった構図は傍から見るとストーカーに見えなくもない。そのことに気が付いた健太郎は急いで千紗の横に並び、一緒に歩き出す。

「何ですか。近寄らないで下さい」

「まあまあ。そう怒るなよ。あれぐらい男なら誰でも読んでるって」「それはわかりますけど。女の子と一緒に出掛けてる時に普通読みますか？」

くどくど説教を始める千紗に健太郎はため息を吐いてしまう。コンビニまでよかれと思って付いてきてあげたのにこの仕打ちとは思わなかった。確かにデリカシーのない真似をしたかなとも思う。

そんな負い目からか健太郎はもうあれこれ口を挟むことなく千紗の言いたいようにさせておいた。もうすっかり立ち止まってしまい、説教が続いている千紗は健太郎が神妙に聞いているのに気が付くと、口を押さえて顔を赤らめる。

「す、すみません。こんな偉そうに説教するつもりなんてなかったんですけど……」

「いいさ。俺が悪かったんだ。許してくれるか？」

「は、はい。私こそすみません……」

突然の終止符におかしな空気になってしまった二人は立ち止まりながら苦笑いをしている。とりあえず険悪な雰囲気からは脱せたのだと健太郎は胸を撫で下ろす。

あまり暗がりでも立ち止まっているのは危険だと感じた健太郎は千紗にそろそろ帰ろうと言おうとした刹那、人の気配を感じた。辺りを見渡すとそこはひっそり静まり返った公園。だが、健太郎は確かにそこに人間の気配を感じていた。

「おい千紗……。誰か公園にいるぞ」

「えっ？　公園ですか？」

健太郎の言葉に千紗はきょろきょろと辺りを窺う。だがそれでも目に見える範囲には誰もいない。

「誰もいませんよ？」

「いや、多分あの樹辺りに隠れてるんだろう」

そう言って健太郎は公園に生えている樹を指差す。その指の指す方を追って千紗も目をそちらに向ける。するとそこには樹から微妙に衣服が見えていた。それに気が付いた千紗は思わず健太郎の後ろに隠れる。

「け、健太郎さん……。だ、誰かいます」

「なっ、だから夜に出歩くのは危ないんだよ。これでわかっただろ」

「こっちに来ないでしようか」

「大丈夫だって。二人組みだし。それに男がいるなら尚更だ」

健太郎は千紗を安心させるために気丈に振舞うが、その実不安もあった。相手がホームレスで切羽詰っていた場合相手に構わず、向かってくるかもしれない。健太郎は警戒をしながら、徐々にその場を離れようとする。

「いいか千紗。ゆっくりゆっくりここから離れるぞ。相手を刺激するなよ」

「わかりました」

そう打ち合わせた後、二人は公園から離れようとゆっくり移動を始める。相手を刺激しないようあくまでゆっくりと移動する。こんな時に限って誰もこの付近を通らない。そのことが余計に二人を不安にさせていた。

何事もなくこの場を離脱できるだろうか。そんな不安に駆られながらも二人は確実に公園から離れていつている。そしてもうすぐ安全圏だというその瞬間、樹に隠れていた何者かが樹から離れて二人へと接近してきた。

最悪の展開になってしまった。不審者はかなりのスピードで追いかけてくる。もうこうなってはこっそりなどと言ってられない。二人は全力でその場から駆け出す。

「くそっ！ 何でこんなことに」

「早く、早く逃げましょう！ 健太郎さん」

駆け出した二人だったが、徐々に相手は接近してくる。どうやら相当足が速いらしく稼いでいたアドバンテージをあっという間に詰めてくる。何とか逃げ切りたい二人だったが、健太郎が少しずつ遅れ始める。

「健太郎さん！ 頑張ってください。もうすぐお家ですよ！」

「お、おう。大丈夫だ。ゼエゼエ……」

息を切らせながら駆け続ける健太郎だったが、ようやくゴールが見えてきた。自宅が目映ったことで健太郎に最後の気力が湧いてくる。

「追いつかれてたまるかああああっ！」

夜分に迷惑な大声で健太郎は気合を入れる。ラストスパートをかけて不審者を振り切ろうと必死に足を上げる。

「健太郎さん！ 早く家の中につ！」

もう既に家へと到着していた千紗は鍵を開けて、健太郎を呼び込む。健太郎は全力で残りの距離を駆け抜け、家へと飛び込む。健太郎が家の中に入った瞬間、千紗は扉を閉めて鍵もかけてしまう。そして玄関で倒れこんでいる健太郎を尻目に今度はリビングへと向かい、窓の鍵も閉める。これでとりあえず窓を割るなどの強行に出ない限り、不審者が入り込んでくる恐れはない。

ひとまず安心した千紗は玄関で倒れこんでいる健太郎を思い出し、玄関へと向かう。するとそこには汗でびしょ濡れになった健太郎が荒い息で寝転んでいる。

「健太郎さん。大丈夫ですか？」

「ああ、大丈夫だ……。それにしても不甲斐無い」

「そんなことないですよ。健太郎さんが気付いてくれなかったら不意を突かれて逃げることも出来なかったでしょうし」

「それより……、外にはもう誰もいないか？」

そう言われて千紗はまだ脅威が完全に去ったわけではないと気付いた。戸締りをしたからといって相手が諦めるというわけではない。千紗は玄関に横たわる健太郎を飛び越して外を窺う。

「えーと……。ああっ!？」

扉に付けられている小さな覗き穴から外を窺った千紗は驚きの声を上げる。明らかに異変があったと悟った健太郎は疲れきった体に鞭を打って立ち上がる。

「どうした？　ちよつと代われ」

乳酸の溜まった足でよろよろしながら健太郎は千紗に代われと告げて穴を覗き込む。するとそこには疲れきったのか玄関のすぐ近くにある門にもたれかかりながら息を整えている者がいた。若干離れているのと暗がりのためはつきりしないが、どうにも薄汚れた格好をしている。

「多分ホームレスだろうなあ……。つーかお前よくあんなのがいる公園で暮らしてたな」

「あんな追っかけてくる人いませんでしたよ。……。それでどうします？」

千紗は不安そうに健太郎に問いかける。その顔は通報した方がよいと言いたそうだったが、自身もホームレスをしていたこともあったか言葉は弱々しい。ホームレスをしていた挙句に逮捕では少々可哀そうとも思ったのであろう。

それを察した健太郎はもう一度よく外にいる不審者を確認する。するとその不審者は何を思ったのか家へと近付いてくる。健太郎は思わず緊張のあまり唾を飲み込むが、近付いてくるにつれ意外な事実が判明した。

「女の子？」

「えっ？」

健太郎が呟いたその言葉に千紗は首を傾げる。女の子のホームレスというと自分のことが真っ先に頭に浮かぶが、見知らぬ人を追いかけるようなとは思ったこともなかった。

「本当に女の子ですか？」

そのことが信じられない千紗はもう一度健太郎に尋ねる。しかし返ってくる返事は一緒だった。健太郎は首を縦に振って肯定の意を

表す。

「お、おいつ。もう目の前まで……」

健太郎がそう慌てると扉をノックする音が聞こえてきた。弱々しく扉を叩く音は恐怖よりも哀れさを伝えてくる。

どうするかといった具合に健太郎が千紗に目線を送ると千紗はお任せしますと目配せをする。責任を丸投げされた健太郎は一つため息を吐くと扉を開ける。相手は弱った女の子だし、危険は少ないだろうと判断した結果だった。

扉が開くなり、目の前にいた少女は玄関に倒れこんでくる。

「う、うわっ！ おい、大丈夫か!？」

「み、水と……。何か食べる物を……」

倒れこんできた少女は慌てて抱きとめた健太郎に対して弱々しく水分と食料を求めてくる。健太郎としてはその前に色々と問いただしたいことがあったが、このままにしておくわけにもいかず、千紗にとりあえずお茶を持ってくるように頼んだ。

千紗はその頼みを受けて、台所へ走っていく。その間に健太郎はとりあえず名前ぐらひは確認しておこうと名前を尋ねる。

「ところであんた、名前は……?」

「あ、あたし……。山中……。山中真美っていうんだけど」

途切れ途切れの声で何とか名前を言い終わった真美は激しく咳き込む。喉がカラカラに渴いているのであろう。健太郎はそれ以上は喋らなくていいと手で促す。

そうこうしている内にコップにお茶を注いだきた千紗が急いで玄関へと帰ってくる。健太郎は千紗が持ってきたお茶を受け取ると、真美にコップを渡す。

「ほら。とにかく飲んで」

「あ、ありがとう……。んぐっんぐ……」

お茶を凄い勢いで飲み干していく様子に健太郎はとりあえずこれで大丈夫だろうと安堵する。まだ油断は出来ないものの、別段悪い人間には見えない。あとは話を聞いていけばいいだろうと見通しを

つけていた。

「ぷはーっ！ 生き返ったあっ！ ホントに死ぬかと思った」

実に美味しいといった具合に息を吐く真美は喉の渇きも癒え、声に張りも出ていた。真美は暫く水の美味さの余韻に浸っていたが、ふと健太郎と千紗の視線が自分に集中していることに気が付く。そう言えば名前を言ったぐらいで他に何も話していないなど真美は思った。特に千紗に至っては名前すら聞いていない。

「ああ、ごめんごめん。何にも詳しいこと話してないのに上がりこんでたら気になるよな」

千紗とは違い、言葉遣いがやや荒っぽい真美は特に畏まることなく姿勢を崩したまま、そう話し始める。怖気づいたり、緊張したりといったような様子は微塵も感じさせない。そういった点では全く千紗とは違うなど健太郎は感じていた。千紗の場合は逆に畏まりすぎるぐらいである。

同じホームレスでもここまで違うものかと健太郎が考えていると真美はゴホンと一つ咳払いをして場の空気を整える。そして口を開き始めた。

「あたしは山中真美って言うんだ。ちょっと訳があって家出してただけど、食べる物にも飲む物にも困ってさ。それであんた達を見かけたから何か恵んでもらおうと思って追いかけたんだ」

「俺は浅井健太郎。この家の家主ってことになるのかなあ、現状では。両親が不在だからな」

「そして私は石川千紗です。一ヶ月ぐらい前にホームレス暮らしから抜け出して今はこの家に厄介になってます」

真美の自己紹介に健太郎と千紗もそれぞれ自己紹介を返すと真美は首を傾げる。どうやら気になることがあったようだ。

「なあ、あんた今ホームレスやってたって言ったな。それで今はこの家で暮らしている……」

「は、はい。そうです」

「ということは……」

千紗の返事を聞くと何やら考え込んだ真美は今度は健太郎の方へ顔を向け、ニヤリと笑う。その笑みに健太郎はとてつもなく嫌な予感がしていた。

「あんた恵まれないホームレスの救出事業をやってるのか？ あたしも救ってくれよ」

「断じてそんなことはやってない！」

いきなり滅茶苦茶なことを言う真美に健太郎は語気強く否定する。既に千紗一人面倒をみている時点で両親に大分迷惑をかけてしまったと思っているのにその上更に一人など考えられない。更にまるでそれを生業のごとく言われたのでは堪らない。

「頼むからあたしをこの家に置いてくれよ。家には帰れないんだよ」

「何でだよ。遠いのか？」

「いや、すぐ近く」

「帰れよっ！」

家がすぐ近くにあるのに何故自分の家に上がりこもうとするのかと健太郎は吼える。家が遠くて更に可哀そうな事情もあったので千紗は何とか助けてやりたいと思ったが、さすがに今回は感情的にも理屈的にも無理だった。

「何だよっ！ か弱い乙女に帰れとか酷くないか！？」

「図々しい女には水をあげただけでも十分だ」

「あの～……」

言い合い繰り広げる健太郎と真美の間に入って千紗は声をかける。それまで静かにしていた千紗が突然割り込んできたので、何事かと二人は言い合いを中断する。

二人が黙ったのを見ると千紗は真美に向かって疑問を投げかける。「家出したってさっき言っていましたけど、原因は何なんですか？」

「あっ、そう言えば詳しいこと話してなかったな。それにしてもあんた優しいね。ちゃんと理由を聞いてみようと思うあたり、この男とは全然違うね。こいつなんか頭から駄目だ駄目だの一点張りだもんな」

「ああ、そうだな。というわけで駄目なもんは駄目だ」

「実はあたしの家さ、親父が再婚することになったんだけどどうしても新しい母親っていうのが受け入れられなくて、家を飛び出したんだ」

真美は健太郎を無視して千紗に事情を話し始める。無視された健太郎は少し腹が立ったが、親の再婚に関しての意見の相違や感情の問題と意外にまともな理由なので態度を改めようと思った。それまでの頑なな態度から少し態度を柔らかく変えていく。

「それでどのぐらい家に帰ってないんだ？」

「もう二週間ぐらいになるかなあ」

「二週間って一番辛い時期ですよ。徐々に食べ物に困り始めて。

一ヶ月ぐらい経つと耐性が付いてるんですけど」

「あんた一ヶ月もホームレスしてたの!？」

千紗の衝撃の発言に真美は驚く。ここ最近では身なりもかなり良くなってきた千紗はもうホームレスの面影などとうに無くなっていく。見た目が落ち着いた美人なだけにホームレスをしていたというだけでも驚きだが、それが自分よりも長い期間ホームレスをしていたのだと知ると真美は上には上がいるものだとか妙な悟りを開いた。

「すごいねあんた。あたしは一ヶ月も耐えられそうにないよ。ねえ、だから住まわしてくれよ」

そう言っただけで真美は健太郎に拝み倒し始める。そう下手に出られると健太郎としては無碍に断りにくくなってしまふ。先ほどまでは断固として拒否しようと思っていたのが、徐々に悩み始めることになってきた。

「でもなあ。もう千紗も住まわしてるのにこれ以上は……」

「ちゃんとバイトもして稼ぐからさ。な、頼むよ」

「って言うか両親と和解しなよ。それが手っ取り早い」

よくよく考えれば和解して家に帰るのが一番いい展開である。そう思って健太郎は提案するが、その提案に真美は首を横に振る。

「そんなことが出来るなら今頃家に帰ってるよ」

「それもそうだよなあ……」

健太郎は頭を掻いて悩む。徐々に流れは真美がこの家に住むことになるという方向に向かっていた。千紗一人ならば良心の訴えに素直に従って住まわせたが、これ以上となると色々考えることも多くなる。

健太郎としてはこれ以上真美にホームレスをさせるのは千紗の時と同様に避けたい。千紗よりは遥かに逞しいとはいえやはりそこは女の子である。危険が迫る不安はある。そう考え始めてしまうともう健太郎は受け入れる気になってきてしまう。両親への説明など諸々は自分がちゃんとすればいいかと思うようになってきていた。

「まあ、いいか。やっぱり何だかんだいってホームレスなんて危険だし」

「マジでっ!？ よっしやーっ! あんた話がわかるな」

喜びを爆発させる真美を見るとやはりこれでよかったんだと思う健太郎だが、その一方で何だか女を複数連れ込んでいる嫌な男のようにも自分が思えてくる。何とも複雑な心境だった。

「何か食べる物ない? もう腹が減ってしょうがないんだよね」

「飯よりも先にまず風呂に入ってくれよ……」

汚い身なりのまま家の中にズカズカ入り込んでいく真美に苦言を呈しながらも健太郎はこれで家の中がより一層明るくなるんだろうなという楽しみや両親への罪悪感などが混在した複雑な心境になっていた。

第八章 浅井家の勢力図

第八章 浅井家の勢力図

真美が浅井家に上がりこんで一週間が経った。健太郎はとりあえず真美には千紗と同じ部屋で暮らすようにしてもらった。さすがに自分一人の家ではないので、この部屋もどうぞご自由にというわけにはいかない。

だが、真美の居住自体については両親から承諾を得ていた。千紗の時といい心の広いというか広すぎる両親に一抹の不安はあるものの、自分が真美は悪い人間ではないだろうと判断していたので問題はなかった。

そして居住の許可を貰った真美その人はすっかり浅井家に馴染んだ様子で日々暮らしている。元々気後れするような人間ではないことはわかっていたが、それでも人様の家でここまで臆せず振舞えるかと思うほど自然体であった。いや、あまりに自然体過ぎた。

「おい……、せめてスカートなりジーンズなりなんか履けよ」

「うん？」

浅井家のリビングに上はタンクトップ、下は下着というラフを通り越した格好で寛いでいる真美は煎餅を齧りながら健太郎の声に振り向く。ソファーに寝そべってテレビを見ている姿はあまりにもみっともなかった。

「この格好が楽なんだからいいだろ。いちいちガタ言うなよ」

健太郎の苦言など意に介さず真美は再びテレビに向き直る。もはやこれは馴染んできたどころか傍若無人の振る舞いである。我慢ならなくなった健太郎は今頃、バイト先で汗水たらして働いている千紗を見習えと言おうとしたその瞬間、真美は信じられない行動を起こす。

健太郎の言葉を遮るようなタイミングで真美の尻からブツ！ と

おならが出た。あまりの奇襲に健太郎は口をパクパクさせたまま、言葉を失っていた。どう見ても自分と同年代のうら若き女の子が人様の、それも男の前で平気で放屁するということに信じられないといった表情である。

「あつ、悪い。出ちゃった」

しかもたったそれだけで今の出来事を済ましてしまふあたり、少なくとも自宅ではごく日常的にしていたのであろう。その点ではすっかり浅井家を自宅と同じぐらい安心し、寛げる空間と思ってくれているのであろうが、少しは恥じらいを持ってもらいたいと健太郎は思った。

健太郎はそう言えばとここ一週間の真美の所業を思い返す。浮かんでくる所業はどれも放屁に勝るとも劣らない豪快なものだった。

まず最初に健太郎の頭の中に浮かんできた真美の所業は風呂場での事件だった。

「なあ、バスタオルないか？」

「うわっ！ そんな素っ裸で出てくるな。タオルなら脱衣場にあるだろ」

全裸で風呂場から出てきた真美に健太郎は目を手で覆いながらタオルの在り処を教える。それにしてもせめて腕で隠すなり何かしてほしいと健太郎が言うのと、真美は豪快に笑い飛ばす。

「どうせこんな胸ぐらい男とそんなに変わらないだろ？ 気にするなよ」

そう言っただけで胸をこれ見よがしに張る真美。確かに控えめな胸ではあるが、それでも女の裸ということには違いない。健太郎は急いで脱衣場へ入り、バスタオルを取る。そして真美にそのバスタオルを突き出した。

「いいからもうこれ持って着替えて来い」

「何だよ、つまらないなあ」

不満そうに唇を尖らせながら真美は脱衣場へ戻る。それを見て健

太郎は一つため息を吐き、真美の所業に頭を悩ます。

「本当に恥じらしいの欠片もないな、あいつは」

だが、それと同時に垣間見えた真美の全身像を健太郎は頭の中に投影しだしてしまふ。

活動的な印象を与える茶髪のショートカットに、強気な性格を思わすややツリ目気味の瞳、そして長身でスレンダーな体型の美少女が健太郎の頭の中に描かれていく。間違いなく魅力的な女の子には違いないが、内面に問題がありすぎた。

「風呂場から全裸で出て来るんだもんなあ……」

それさえなければと残念に思った健太郎だったが、まだこんなものは序の口だった。

次に健太郎の記憶から呼び出されたのはつい最近の出来事で場所は浅井家のトイレであった。

「なあ、ケン。ちょっとお願いがあるんだけどさあー」

トイレから聞こえてくる真美の声。何かしら嫌な予感がすると思いなながらも呼ばれた以上、行くしかないと思健太郎はトイレへ向かう。健太郎のことを勝手にケンというあだ名で呼んだり、トイレに呼びつけたりと気ままな真美にすっかり健太郎は振り回されていた。

「何だよ。何かあったのか？」

トイレの目の前まで来て健太郎は中の真美に声をかける。予想外の行動を避けるよう、ドアにもたれかかりながら声をかけることを忘れない。するとドアにもたれかかっている健太郎は背中に圧力がかかったのを感じた。ドアを開けて健太郎をからかおうとすることが何となく予想できたため健太郎はそれを未然に回避することに成功した。

すると中からはチツと舌打ちする音が聞こえてきた。健太郎は先読みで成功した余裕からかニヤニヤしながら中に真美に再び声をかける。

「どうした？ 何か問題でも起こったか？」

「くそっ、意地の悪い……」

「何もないならもう行くぞ？」

「ああ、紙がもうすぐなくなりそうなんだけど、どこにあるかわからないから持ってきてくれないか？」

真美のお願いとはトイレトペーパーが切れそうだから持ってきてくれというものだった。それにしてもなくなりそうだというのが、よくわからない。別になくなりそうだというなら今は大丈夫なわけだから自分はトイレに籠っていなくても、取りに行けるわけである。それに一緒に付いて行って、場所を覚えておけば何かと便利なのに。健太郎はそう思ったが、特にそれ以上考えることなくトイレトペーパーを取りに行った。

そして何ロールかを持ってトイレに戻ってくると中の真美に声をかける。

「持ってきたぞ。それでどうするんだ？　ここに置いとけばいいのか？」

「ああ、ありがと。ついでだし中に渡して」

「中って。お前、今大丈夫なんだろうな？」

「大丈夫大丈夫。駄目だったら渡してって言わないし」

「それもそうか。そんじゃ開けるぞ」

健太郎はそう言ってドアを開ける。するとそこには便座に座っている真美がいた。下着を下ろしたまま座っている真美はニヤニヤ笑っている。これで健太郎を驚かせてやろうという魂胆らしい。しかし元からこんなことだろうと想像していた健太郎は全然驚かなかった。何事もなかったかのようにトイレトペーパーを置いて外へ出る。想定外の反応に真美は口惜しがる。

「ちよっと！　何かあってもいいだろう？」

「何かとは？」

もう外へ出て、相変わらずドアにもたれかかってこれ以上開けられないように対策をしている健太郎は完全勝利を確信した。子供のようない意地の張り合いだが、当人達にとっては本気の戦いである。

どちらが思惑通りに掌の上で踊ってしまうのか。今現在では健太郎が優勢でことが運んでいる。これはあまりにも真美が恥じらいのないう様子で行動してきたことが、健太郎に耐性を付けてしまったことも関係しているだろう。この状況が健太郎と千紗だったら今頃は両者赤面で気まずい雰囲気になっているところである。

「くそっ。千紗に言い付けてやる。ケンに大事な所を見られたって言うてやる」

「ちよっ、おまつ。何でそんなところに話がいくんだ!？」

思わぬ所へ話を持ち込もうとする真美に健太郎は必死になって焦りだす。こういう反応が見たかったんだと真美はほくそ笑む。もはや真美にとって健太郎は恩人から、からかって遊ぶ相手へと移り変わっていた。

「千紗。気を付けろ、ここに変態がいるぞ!」

「お前! そんなでかい声で変態とか言うな!」

「つていうか早くドア閉めなよ。本当に変態になっちまうよ?」

「わわっ!? すまん!」

真美に指摘されてやっと気付いた健太郎は急いでトイレの扉を閉める。トイレの中からは勝ち誇った笑い声が聞こえてくる。こんな感じで突っ掛かってくる真美に健太郎は半ば呆れていた。からかうのはともかくそれをお色気を通り越した次元でやるのはやめてほしい。もう少しデリカシーを持ってほしい。これが健太郎の切なる願いだった。

ここ最近の真美の行動を振り返った健太郎はため息を吐いてしまう。健太郎の願いは全く成就していない。たった今かまされた放屁などまさにその最たる例である。

回想から帰り、ため息を吐いていた健太郎の目の前では真美が煎餅を齧りながら尻を掻いている。しかも下着の中に手を突っ込んで直にである。下着が手の分だけ伸び、チラチラと見てはいけない所が見えかけても相変わらず平然としている。

こんな体たらくを見ていると健太郎としては真美のことが心配になってきてしまう。千紗の時も心配事はたっぷりあったが、真美は真美で問題が山積みのものである。健太郎は現状を確認しようと真美にいくつか質問をしていく。

「なあ、外でもお前はこんな感じなのか？」

「んあ？」

煎餅を加えながら振り返る真美は何の用だと言わんばかりに不機嫌そうである。どうやらテレビが見たいようで、こっちの話に付き合おうという感じには見えない。

「テレビ見たいんだから邪魔するなよ」

そう言ってテレビに向き直る真美。あまりの態度の悪さに健太郎は少しイラっときてしまう。お前は一体何様のつもりだと怒鳴りつけてやりたいが、声を荒げると確実に喧嘩になるだろう。そうなる真美は真美で容赦なさそうだし、自分も真美相手に加減が出来るかわからない。何しろ全く女の子っぽさを感じさせないので本気で応じてしまいそうな気がする。そこで健太郎はとっておきの武器で真美に迫る。

「迫い出すぞ」

「!？」

健太郎が放った一言で真美は過剰に体をビクツとさせる。そしてすぐさま健太郎の方へ振り返るところか健太郎に詰め寄り、悔しそうな顔をしている。

「ひ、卑怯者。それを言ったらあたしは逆らえないだろうが」

「ふふん。武器は有効に使わないとな」

「ぐぐぐっ……」

口惜しそうに歯噛みする真美だが、現状は圧倒的に不利である。追い出されたら元も子もない真美は観念して健太郎の言うことを聞くことにした。

「それで何だよ。外であたしがどうしてるのか聞きたいのか？」

「ちゃんと聞いているじゃないか。それでどうなんだ？」

「どうって今とあんま変わんないけど」

「お前は外でも構わず屁をこいたり、尻搔いたりしてるのか？」

「そりゃちょっとは配慮するけど我慢は体に悪いだろ？」

外では少しは配慮していると聞き、健太郎は安堵した。少なくとも開けっぴろげなままではないだけでまずはよしといった具合である。見てくれは悪くないどころか上質なだけにそういう態度が身に危険を招きそうで健太郎は心配していたのだった。その点に関して安心した健太郎は思わず言うつもりはなかったことを口走ってしまった。

「これでもう少し慎みがあればかなりいい女なのになあ。勿体無い」
「えっ！？ いい女？」

健太郎が零したいいい女という言葉に真美は過剰に反応する。あれだけやりたい放題していた真美がその一言で顔をあっという間に朱に染めてしまう。それだけでなくあたふたと慌て始め、落ち着きがなくなっていた。

「い、いい女って……。そんなわけないだろう。あたしがいい女だなんてそんな……」

そう言いながら体をくねらせる真美はいつものギャップもあった非常に可愛らしかった。どうやらあまりそういう風に言われたことがないらしい。

あれだけ恥じらいのない様子を見せ付けていた真美の思わぬ態度に健太郎は、

「弱点見つけ」

と頭の中にこの一事を記憶させるのだった。

夜、健太郎達はバイトから帰ってきた千紗を加えて晩ご飯を食べていた。キッチンのテーブルで済ましてしまうわけだが、三人も席に着くと皿がたくさん並び、少し窮屈であった。一番真美が場所を取り、次に千紗、そして健太郎に関してはおかずが一つの皿にまとめられてしまっている。

「おい、別に一つにまとめなくても余裕あるだろうが」

健太郎はあまりの扱いに抗議を始める。彼が言うとおり、別にそこまでしなくてもスペースはまだ空いている。不当な扱いを受けている健太郎の抗議はもつともなことであろう。

「男なんだから細かいこと気にすんなよ。モテナイぞ」

真美のその言葉を千紗は心の中で否定した。一人とんでもない劣情を持って余してる程の女性がいますと。そんなことなど全く知らない真美と健太郎は俺だってちょっとはだとか全くないだろうとか言い合いを続けている。馬が合うのか合わないのかよくわからない二人だと千紗は思ったが、結局喧嘩する程仲がいいということなのだろうと納得した。確かに喧嘩はするがそこに陰悪な雰囲気は感じられない。だいたい本当に仲が悪いなら口だけで留まらずとうの昔に健太郎は真美を追い出しているだろう。

だが、真美を追い出そうという気がない健太郎の心を知ってか知らずか真美の所業は我俣だった。まるで自分は追い出されないと悟っての行動かと思うぐらい大胆である。

「だいたいね、ケンはおんなの子をもっと大事にするべきだ。場所の広さぐらいでガタガタいうなよ。ねえ千紗？」

「えっ！？ う、うん」

突然話を振られた千紗はよく考えずに返事をしてしまう。そして暫くしてから質問の内容を悟ってあたふたするのが常だった。

「ち、違う。私そんなこと……」

「千紗まで……。俺の家なのに」

もはや浅井家における主導権は真美が握っていた。そしてそのおこぼれのような形で千紗が続き、健太郎は徐々に肩身が狭くなっていた。住まわせてもらっている自分達が好き勝手に振舞って申し訳ないと思いつながら千紗は真美のある限り健太郎の立場はこれから先も小さくなっていくんだろうなと思った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9839d/>

野良少女

2010年10月28日07時46分発行